傳紀貴ゝく　高野聖切　第二種（乙）

301
10

帙入

始

傳紀貫之書

高野切

第二種（乙）

釋文

傳紀貫之書　高野切　解題並釋文

解題

高野切の筆者は紀貫之一人の筆として傳へられてゐるが、實際は幾人かの寄合書である。今日明かになつて居るものは三人の筆で、即ち三種に分れて居ることは前述の如くで書風は三種各其趣を異にし、古筆中魏然として群を抜き富嶽を見るの概がある。

本掲載の高野切第二種は卷二春下卷三夏卷五秋下卷八離別の古今集四卷を書寫したもので、高野切三種中最も古體に屬し、頗る氣品の高いものである。形態は著しく緊密整正で第一種の寛宏にして餘裕綽々たるとは大に趣を異にし、嚴正にして間隙の乘ずべきを見ない。第一種は字形に大小を配合して變化を表はしてゐるが、これは殆んど一律の形狀を有し、聊か單調の傾きはあるが、却つて高雅壯重の趣を存して

ゐる。又字形は連綿のために一種の調子を帶び、一般に右肩が上る傾向がある。併しこれが爲めに字形の統一を失ふが如きは更になく、寧ろ健勁の趣を強からしめる感がある。運筆の點に至つては三種中最も豪宕健勁で、緩急輕重の如き筆法を度外に措き、紙中に喰入るが如き沈着と充實とをもつてゐる運筆は、到底他の追隨を許さぬ强味がある。文字の連續は七字に及んでゐるものもあるが、三四字のものが多い。此の種は第一種より幾分連綿のために文字の變化をつくつてゐるが、これも自然の運筆に從つてゐるのみで敢へて技巧の弊に陷らず却つて莊重剛健の氣分をよく保つことが出來る。此の筆者の筆は前者の筆よりも筆端が短く、所謂延喜筆の筆端一二分の間を使用したものではあるまいか。筆路は鋼線の如くで細大の變化に乏しく墨繼ぎの距離は殆ど一定してゐる。濃淡の變化配合に至つては筆者が本より意を用ひて技を凝らさないから、隨つて濃所が左右に並び合ひ或は

淡所が左右に並び合ふといふ場合があつて第一種に比しては稍々變化の美を缺く嫌がある。併し之が却つて高古健勁豪宕なる感を與へる所以で、筆者の技倆の非凡なるを示すものである。

よみける　（巻二春歌下）

者那ちら數か世のやとり者多れ可しる
われ爾をしへよゆ支てうらみむ
雲林院爾てさくらの者なをよめる
所世以
いさゝくらわれ毛ちりなむいとさ可り
あ利なは悲とにう支め美え那む
まつひと无こぬ毛のゆ恵爾うくひ春の那
きつる者那をゝりてける可那
寛平のおほ无と支能支さいのみやの
う多あ者せの宇た
ふちはらの於支可せ
さ久らは那ちく散な可ら爾あ多なれと

たれ可者ゝるをうらみはて多る
多いしら數　よみ悲としら須
うくひ春の那久のへこと爾きてみれは宇
つ呂ふ者な爾可世曾ふ支ける
ふ久可せを那支てうらみようくひ春者
われや者ゝな爾てた爾ふれ多る
治子乃あ所む
ちる者那のな久爾しとまる毛の那らは
われうく悲春におとらましや者
仁和の中將のや春むところのいへ爾う多
あは世世むとしけるとき爾よめる
ふちはらのち可け
者那のちることやわひし支はる可數み

たつ多能やまのうくひ春のこゑ
うくひ春の那久をよめる
曾世い
こつ多へ者おの可者ふ支爾ちるは那を
たれ爾おほ世てこゝろ那久らむ
し可能やまこえ爾氐をむ那のお保く
あへ利ける爾よみてつ可はしける
徒らゆ支
あつさゆみ者るのやまをこえ久れ者
美ち毛さりあへ數はな曾ちり个る
寛平のおほ无と支のきさいのみやの
うたあ者世能宇多
はるのゝにわ可那つまむとこし毛のをち

り可ふ者なにみちはまと悲ぬ
やまてら爾まうて多りけるよめ利ける
たいしら數　よみひとしら須
可者つ那久ゐてのやまふ支ち利爾けり
はな能さ可利爾あ者まし毛のを
このう多者あるひとのいはるゝ多ちは
那能支よと毛可うた奈り
者るのとく須久るをよめる
みつね
あつさゆみ者る多ちしよりとしつ支の
いる可ことく毛於毛保ゆる可那
やよ悲爾うくひ春のこゑ能悲さしく
きこえ散り个れ者よめる

つらゆ支

な支とむるはなしなければうくひ春毛
いまは毛のうくな利ぬくら那り

（巻三夏歌）

佐つ支こ者な支てふり那むほとゝ支須
またしきほとのこゑを支可者や

古今倭謌集巻第五

秋哥下

これさ多のみこ能いへのう多あ者せ
爾よめる

不むやのあさや須
不久可らにあ支の久散支能しをるれ者
むへやま可世をあらしてふらむ

久さ毛支毛い呂可はれと毛わ多つみの那
みの者な爾曾あきな可りける

あ支のう多あは世しけると支爾よめる

きのよし毛ち
毛みち世ぬと支はのやま者ふ久可世能
於と爾やあきを支ゝわ多るらん

たいしら春

よみ悲としら數
きり多ちて可利曾那久へなるか多を可の
あし多の者らは毛みぢもみちしぬらむ
わ可やと能わさた多毛いま多かりあ个ぬ爾
また支もみつる可美那悲の毛り
ちはやふる可み那悲やま能毛みちは爾
お尤ひ者可けしうつ呂ふ毛のを

貞觀のおほむと支爾弘徽殿の於まへ爾
むめ能きありけ利にしの可多爾させり
けるえ多毛みちしはしめた利けるをうへ
爾さふら不をのこと无う多よむついて
爾よめる

ふちはらのかち於む
於なしえをわ支てこの者能い呂つ久は爾し
こ曾あ支の者しめなり个禮
いしやまへまうてけるとき於と者やまの
毛みちを美て

支のつらゆき
あ起可世能ふき爾し悲よりおとはやま
美ねのこ春ゑ无い呂つ支爾けり

これさ多のみこ能いへのう多あ者せに
としゆきのあそむ
しらつゆのいろ者ひとつをい可爾し氐あ支能
このはをちゝ爾そむらん
多々美ね
あ支能よのつゆを者徒ゆとお支那可ら
可りの那美多やのへをそむら舞
よみひとしら須
多いしら數
あ支のつゆい呂こと〳〵にお个者こ曾やま
のこ能者毛ちく散なるらめ
つらゆき支
毛るやまのほとり爾てよめる
しらつゆ无し久れ毛い多久毛るやまはし多

はのこら數いろつ支爾けり
あ支のう多とてよめる
毛と可た
あめふれとつゆ毛ゝらしを可さとりのや
ま者い可て可光みちそめけむ
可みのやしろ能あ多りをま可利けるとき
い可支能うちの毛みちを美てよめる
つらゆ支
ちはやふるかみのい可支爾には不久數毛あ
き爾盤あへ春うつ呂悲爾个り
これさ多のみこ能いへのう多あは世爾に
にふの多ゝみね
あめ不れ者かさとりやま能毛みちはゝ

ゆ支可ふ悲とのそて散へ曾天る
寛平のおほ无と支能きさいのみやの
う多あ者せ爾
よみひとしら須
ちらねと无可ねて曾をしき毛みちはゝ
いまは可支りのい呂とみつれ者
やまとの久にへま可りけると支爾さほやま
に支り能多ちけるを美てよめる
きのと光能り
多可ため能爾しきなれ者可あ支ゝりのさ
ほのやまへを多ち可久須らむ
これさ多のみこ能いへのう多あ者せ爾
よみひとしら須

あ支ゝり者けさ者那多ちそさ保やまの
はゝその毛みちよ曾にて无美む
あ支能う多とてよめる
さ可のうへ能これのり
さほやま能者ゝそのいろはう春けれと
あ支は不可く无な利爾ける可那
悲とのいへ能前栽のき久にゆひつ个て
うゑけるう多　な利ひらのあそむ
う恵し宇ゑ者あ支なきと支仁佐可さらん
者なこそちらめねさへ可れめや
寛平のおほ无と支にき久の者那を
よませ多まける
としゆ支能あそむ

悲さ可多の久毛能うへ爾て美るき久は
あまつほしとそあやま多れ个る
このう多はまたうへゆるされ散利个る
ときめしあけられてつ可うまつれ
りけるなり
これさ多のみこ能いへのう多あは世のうた
きのと无悲ら
つゆな可らを利てかさゝ无支く能者那
於い世ぬあ支のひさし可るへく
寛平御時の支さいのみやの哥合能う多
於ほえ能ち散東
うゑしと支はなまちと保爾あ利しき久宇つ
ろ不あき爾あ者むとや美志

於なしおほ无と支爾さられ个るき久あ
は世爾須者まをつ久利てきくの者那
うゑ多利ける爾そゑ多り个るうた
不支あ个のはま能可た爾支くうゑ多
りけるをよめる

須可者らのあそ无
あ支可世能ふ支あけ爾たてるしらき久は
者な可あらぬ可那みのよ數る可
仙宮爾支久をわけてひとのいたれるを
よめる

そ世いほうし
ぬれてほ數やまちのき久能つゆのま爾
いつ可ちと世をわれ者へ爾けむ
きく能者なの毛と爾てひとの悲とり

まてる可たをよめる

友則

はなみつゝひとまつと支能し呂多へのそ
て可とのみ曾あやま多れける
お保さはのい个の可た爾き久うゑ
多るをよめる

悲と无とゝお无ひし者那を於保さ者の
い个のそこまて多れ可うゑ个む
よ能な可の者可那支ことをお无ひけるを
りに支く能花乎みてよみ个る

つらゆ支

あ支のき久爾ほふ可支り者かさしてむ
はなよりさ支としらぬわ可みを

しら支久能者なをよめる

凡河内躬恒

こゝ呂あてに乎らはやをらんはつし毛の
於支まとは世るしらき久の者那
これさ多のみこ能いへのう多あは世の哥
よみ悲としら數
い呂可はるあ支能き久をはひとゝせ爾
不多ゝひ爾ほふ者なとこそ美れ

仁和寺爾き久の者那めしけると支に
宇多曾へてたてまつれとおほせられ
けれはよみて多てまつりける

多ひらのさふむ

あ支を於支てと支こそあ利けれ支久の花

うつ呂ふ可らにい呂のまされ盤
悲とのいへな利けるき久の者那をうつ
し氐うゑ多り个るをよめる

貫之

佐支所めしやとし可はれはきくの者那
いろさへ爾こそうつ呂悲爾けれ

多いしら數　よみひとしら須

さほやま能者ゝその毛みちゝりぬへみ
よるさへ美よとてら數つき可け
美やつ可へ悲さしてつ可うまつらてやま
さとにこ毛りはへ利けると支に
よめる

ふちはらのせ支を

おくやま能い者可け毛みちゝりぬへし
てるひの悲可りみると支那久て
多いしら數　よみひとしら數
たつ多可者毛みちみ多れてな可るめり
わ多らは爾しきな可や多え那む
このう多あるひと那らのみ可との
おほみうたとなむまう須
たつ多可盤无みちはな可るか美那悲能
美むろのやま爾し久れふるらし
ま多はあ須可々者毛みちは那可る
こひし久者美て无しのはむ无美ちはを
ふ支那ちらしそやま於ろしの可世
あき可せ爾あへ春ちりぬる毛みちはの

ゆくへさ多めぬわれそ可なしき
あ支はきぬ毛みちはやと爾ふ利し支ぬ
美ち不みわけてと不ひともなし
ふみわ个てさら爾やとはむ毛みちはの
不り可久して志美ちとみ那可ら
あ支のつきやまへさや可にてらせる者於
つる毛みち能可須をみよと可
ふく可せのち久散のい呂爾みえ徒る者
あ支のこ能はのちればな利けり
せ支を
し毛の多てつゆのぬ支こ曾毛ろ可らし
やま能爾しきの於れと可つちる
雲林院の支能可个爾多ゝ須みて

よみける

僧正遍昭

わひゝとのわ支て多ちよるこ能无と者
多能む可个那久毛

美ちちりけり

二條の支さきの東宮の女御ときこえ
けるとき御屏風耳多つた可者に无み
ちな可れ多る可た可けるをたい爾て
无美ちはのな可れてとまるみ那と爾盤
久れなゐ不可支那みや多つらん
な利ひらのあそむ
ちはやふる可みよ无支可數たつ多可盤可

ら久れなゐに美つ久ゝると者
これさ多のみこ能いへのう多あ者せのう多
としゆきあ所む
わ可支つるみち毛しられ春久らふやまき
支能このは能ちるとま可ふに
多ゝ美ね
可み那悲の美む呂能やまをあ支ゆけ者
にし支多ちきるこゝちこ曾春れ
き多やま爾毛みちをらむとてま可れ
りけると支に

つらゆ支

美る悲と无那くてちりぬるお久やまの
毛みちはよるの爾しきな利けり

をのといふところに春みはへ利ける
と支によめる
あ支のやま无みちをぬさと多む久れ盤
須むわれさへ曾多ひこゝちぬ數る
可みなひやまをこえ須支て多つた可者
をわ多りけると支爾毛みちのな可禮
个るを

きよはらの不可やふ
かみ那悲のやまを須支ゆ久あ支なれ者
多つた可者爾曾ぬさは多む久る
寛平のおほ无と支の支さいのみや
のうたあ者せの宇た
ふちはらの於支可せ

しら那み爾あ支のこ能者のう可へる乎
あま能な可世るふね可と曾美る
多つた可者のほとり爾て　これのり
毛美ちはのな可れさりせは多つ多可盤
美づのあ支をはたれ可しらま志
志可能やまこえにてよめる

はる
やま可者に可世能可け多るみちのつらき
な可れ毛あへぬ无みちな利けり
い个の保とり爾て毛みちのちるを
よめる

美
美つね
可世ふ个盤於つる无みちほ美つ支よみ
ちらぬ可けさへそこにみえつゝ

亭子院の御屏風のゑ爾か者わ多らむと
須るひと能毛みち散るきの毛とにむまひ
可へて多てるをよませ多まけれ者つ可宇
まつれる
多ちとまり美てをわ多らむ毛みちはゝ
あめとふると无みつはまさらし
多いしら數　よみひと志ら春
保爾毛いてぬやま多を无るとふちこ呂无
いなはのつゆ爾ぬれぬよはなし
これさ多のみこ能いへのう多あは世
爾よめる　多ゝ美ね
やま多毛るあ支の可りいほ爾お久つゆ
者い那おほ世とり能なみ多なりけり

たいしら數　よみ悲としら春
かれるた爾おふるひつちのほ爾いてぬ盤
よをいま散らにあ支はてぬと可
あ支のう多とてよめる
可ねみのおほ支み
多つた悲め多む久る可み能あれ者こ所
あ支能このはのぬさとちるらめ
き多やま爾多け可りにま可れりける
悲よめる
毛みちはゝそてにこ支れて毛てゝ
なんあ支を可支りとみむ
悲との多め
寛平御時爾ふるう多ゝてまつれと於

ほ世られ个れは多つた可者毛みちば
那可るといふう多を可支て曾れの於
なしこゝろをよめる　於支可せ
美やまよ利於ち久るみつのいろみて曾
あ支は可きりとお无ひしりぬる
あきの者つるこゝろを多つた可はを
お无ひや利て
つらゆき
としことに毛みちはな可數多つた可は
美なとやあ支能とまり那るらむ
九月卅日於ほゐ爾てよめる
ゆふづくよを久ら能やま耳那久之

可能こゑ乃うち爾やあ支波具る
ら舞
於なしつこ无利乃比　美つ禰
美ちしら盤多つ禰毛いなむ无
見ちはぬさ曾多む个氐
あ支盤いぬめ利

巻第五

古今倭歌集巻第八

離別

たいしら數　あ利はらのゆ支ひらあ所む
多ちわ可れいなはのやま能みね爾於不る

まつとしき可者いま可へ利こむ
よみひとしら須
須可る那久あ支のはき者らあ散多ちて
多悲ゆ久ひとをいつと可ま多む
可支り那き久毛ゐのよ曾にわ可ると毛
ひとをこゝろ爾お久ら散むや者
乎のゝ能ちふ可みちの久にの春け爾
ま可利けると支に者ゝのよめ利个る
多らちねのおやのま毛利とあひそ不る
こゝ呂は可り者さ支那とゝめ所
さ多と支能美このいへ爾てふちはらの
きよふむ可あふみ能春个爾ま可利ける
ど支にむまの者那む个しけるよよめる

き能としさ多
け不わ可れあ春はあふみとお无へと毛
よやふ个ぬらむ曾てのつゆ个支
こしへま可利けるひと爾よみてつ可
はし个る
かへるやまあ利とは支けと者る可須み
多ちわ可れなはこひし可るへし
ひとのむま能者那无个爾よめる
きのつらゆ支
をしむ可らこひしき毛のをしら久毛の
多ち那むのちはなにこゝちさむ
と毛の悲と能久にへま可利けれは
ありはらのしけ者る

わ可れて盤ほとをへ多つと於毛へ者や可つ
美那可ら爾可ねてこひしき
あつまの可多にま可利けるひと爾よみて
徒可者し个る
い可このあつゆき
於毛へと无みをしわ个ね盤め爾見えぬ
こゝろをき美に多久へて曾やる
あふさ可爾てひとをわ可れけるとき爾
よめる
な爾はのよ呂つを
あ不散可能世きしまさし支毛の那らは
阿可數わ可るゝ支み乎とゝめよ
多以しら數
よみひとしら須

からころ无多つ悲はき可しあさつゆの於
支てしゆ个者けぬへ支毛の遠
このう多はあるひとつ可さを多うは利
てあたらし支め爾つ支てとしへて須
み个る悲とをは春てゝ多ゝあ春那
む多つとは可利遠いへ利けると支にとも可
久无い者てよみてつ可者しける
ひ多ちへま可利けると支にふちはらの
きむとしによみてつ可者しける
あさなけ爾美へ支ゝみとし多のまね者
於毛ひ多ちぬる久さまくらなり
きのむねさ多可あつまへま可れりける
と支爾悲とのいへにやとりてあ可つ支に

いて多つとてま可利まうししけれ者を
むなのよみて多せりける
よみひとしら須
えそしらぬいまこゝ呂美むいのちあら者
われやわ春るゝひとやとはぬ東
あひしりてはへり个る悲とのあつま能可
多へま可利けるをお久るとてよめる
きよ者らの不可やふ
久毛ゐ爾无ふ可支こゝ呂のお久れね盤
わ可ると悲とに美ゆ者可利那り
と毛のあつまへま可りけると支によめる
よしみねのひてを可
しら久无のこな多可那た爾多ちわ可れこ

ころをぬさと久た久多悲可那
美ちの久へま可利けるひと爾よみて
つ可者しける
徒らゆ支
志ら久毛のやへ可さなれるをち爾无
お无はむ悲と爾こゝ呂つたへ那
悲とをわ可れ个ると支によみ个る
わ可れてふことはいろ爾无あら那久に
こころにしみてわひしかるらむ
あひしれる悲とのこしの久にゝま可利て
としへて京爾まうて支氐ま多可へり
けると支によめる
於ふ可者ちのみつね

可へるやまなそはあ利てのある可ひ盤
きて光とまらぬ那爾こそあ利个れ
こしの久爾へま可利个るひと爾よ美て
つ可はし个る
よそにのみこひやわ多らむしらやま能
ゆ支みるへ久光あらぬわ可み者
於と者やまのほとり爾て悲とをわ可る
とてよめる

徒らゆき
於とはやま二多可久那支てほとゝ支數き
美可わ可れ遠をしむへらなり
ふちはらのゝち可け可ゝら毛のゝつ可ひ爾
な可つ支能つこもりか多爾ま可りけるに

うへのをのこと光さけ多うひ个るついて爾
ふちはらの可ね毛ち
毛ろと光にな支てとゝめよきり〳〵數あ
支のわ可れ者をし久や者あらぬ
多ひらの光と能り
あ支ゝりのと毛爾多ちてゝわ可れな者ゝ
れぬお光ひ爾こ悲やわ多らん
みな毛とのさね可つ久しへゆあみむとて
ま可り个ると支爾やま散支爾てわ可れ
をしみけるところ爾てよめる

し呂め
いのち多爾こゝろに可なふ毛の那らは
なに可わ可れの可なしからま志

やま散支より可みなゐの毛利まて
於久りのひと〳〵能ま可利て可へ利可てに
し氐わ可れをゝしみ个れ盤よみける
み那毛とのさね
ひとや利のみち那らな久爾於ほ可た者
い支うしといひてい散可へりなむ
いま者これよ利可へりねと散ね可いひ
个るをりによめる
可ね无ち
し多者れてき爾しこゝ呂のみ爾しあれ者
かへるさま爾は美ち毛しられ春
ふちはらのこれを可ゝ无さしの春け爾
ま可りると支にお久利爾あふさ可

乎こゆとてよみ个る
つらゆ支
かつこえてわ可れ无ゆく可あふ散可者ひ
と多のめなる那爾こ曾あ利个れ
於ほえのち不る可こしへま可りける
无ま能者那む个爾よめる
ふちはらの可ね春个
きみのゆ久こしのしらやましらねと毛ゆき
のまに〳〵あとは多つねむ
悲との花山爾まうて支てゆふさ利つ可
多可へりなむとしけるとき爾よめる
僧正遍照
ゆふ久れのま可支者やまとみえぬ可那

よるはこえしとやとりとるへ久
悲え爾のほりて可へ利まうて支ける
ひと〳〵わ可れけるついて爾よめる

律師有仙

わ可れをはやまの佐久ら爾ま可世天む
とめむとめし者ゝ那のまに〳〵
雲林院のみこ舍利ゑ爾ひえ爾のほ利て
可へ利けるとき支に散くらのはな能毛とに
てよめる

遍照

やま可世に散久らふ支まきみ多れなむ
はなのま支れ爾たちとまるへ久

有仙

こと那らはきみとまるへ久爾ほ者なむ
かへ春者ゝ那のう支にや者あらぬ
仁和のみ可との美こにおはしまし志个るとき
爾不るの多きこらむし爾於者しまし氏
可へり多まひける爾よめる

けむ个いほ宇し

あ可須し氏わ可るゝなみ多ゝ支爾曾ふみつ
ま散るとやし毛は美るらむ
可むな利のつほ爾めし多利个るひお保
美支那と多うへてあめのいた久ふり
个れ盤ゆ不さ利ま氏はへりてま可利ける
をりに支のつらゆ支可さ可つ支をとりて
よめる

あ支はきの者なを者あめ爾ぬらせと无
きみ乎盤ましてをしとこ曾於毛へ
とよめり个る可へし爾よめる

かねみのおほ支み
をしむら无悲とのこゝろをしらぬま爾あ
支能しくれと美曾ふり爾ける

可ねみのおほきみに者しめてあひ毛の
か多利し氐わ可れけると支よめる

みつね

わ可るれとうれし久毛ある可こよひよ利
あひみぬさ支爾那爾をこひまし

多いしら須　よみ悲としら春
あ可春してわ可るゝそて能しら多まを

きみ可ゝ多美とつゝみて曾ゆく
可支り那久お无ふなみ多爾そ保ちぬる
曾て盤かわ可しあはむ悲まてに
か支久へしことはふらな无はる散め爾
ぬれ支ぬき世て支みをとゝめ舞
しひてゆく悲と乎とゝめむ佐久ら者那
いつれ可みちとまと布ま天ち禮
し可のやまこえにいしゐの毛と爾て毛のい
悲けるひとのわ可れ个ると支によめる

つらゆき

む須ふてのしつ久爾ゝこるやまのゐ能あ可
て无悲とをわ可れぬる可那
美ち爾あへ利个る悲との久るま爾毛

の乎いひつ支てわ可れ个るところにて
よめる　紀友則

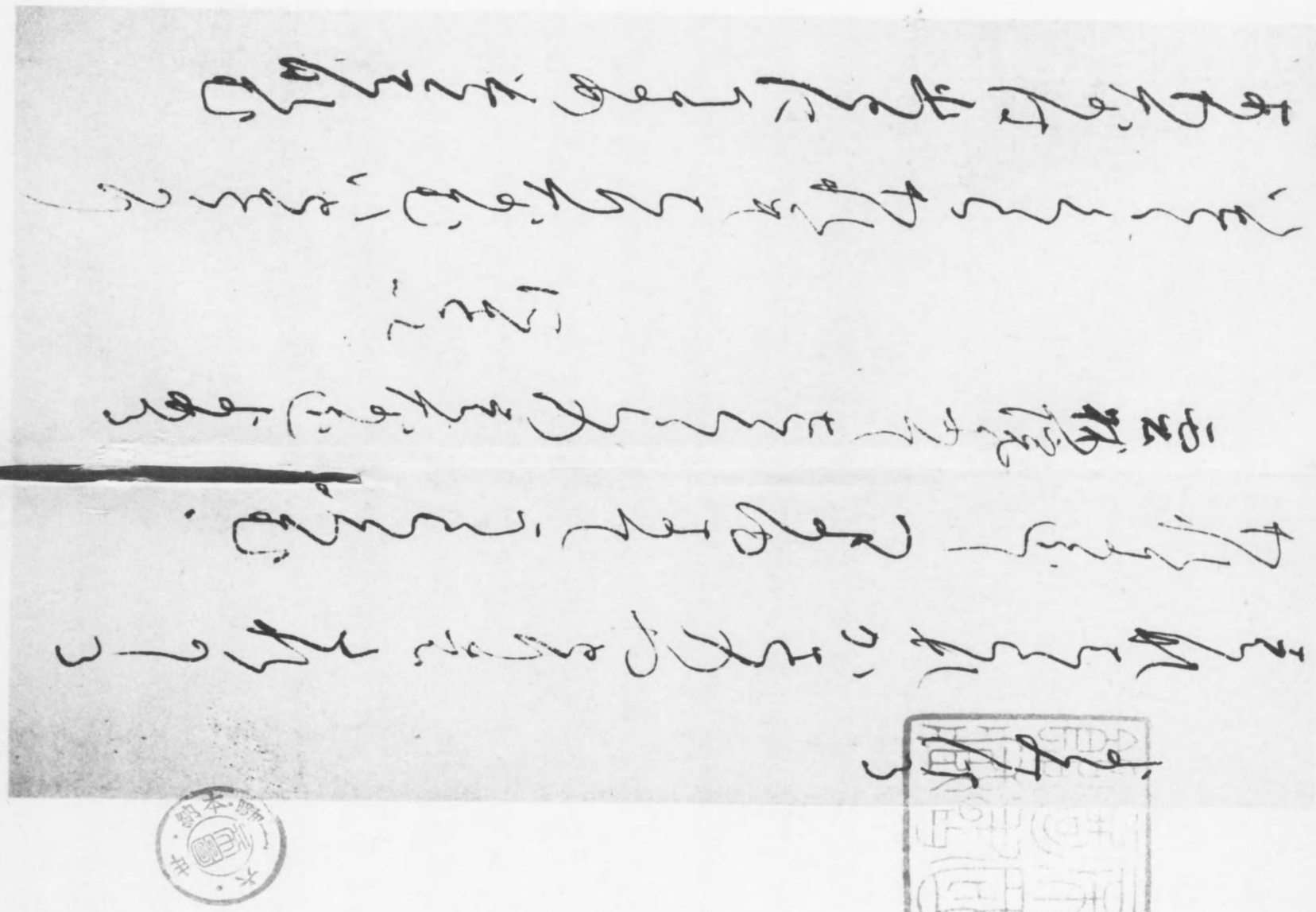
し多能お悲のみち盤可たゝわ可る
と无ゆきめ久りて毛あはむ
と曾於无布

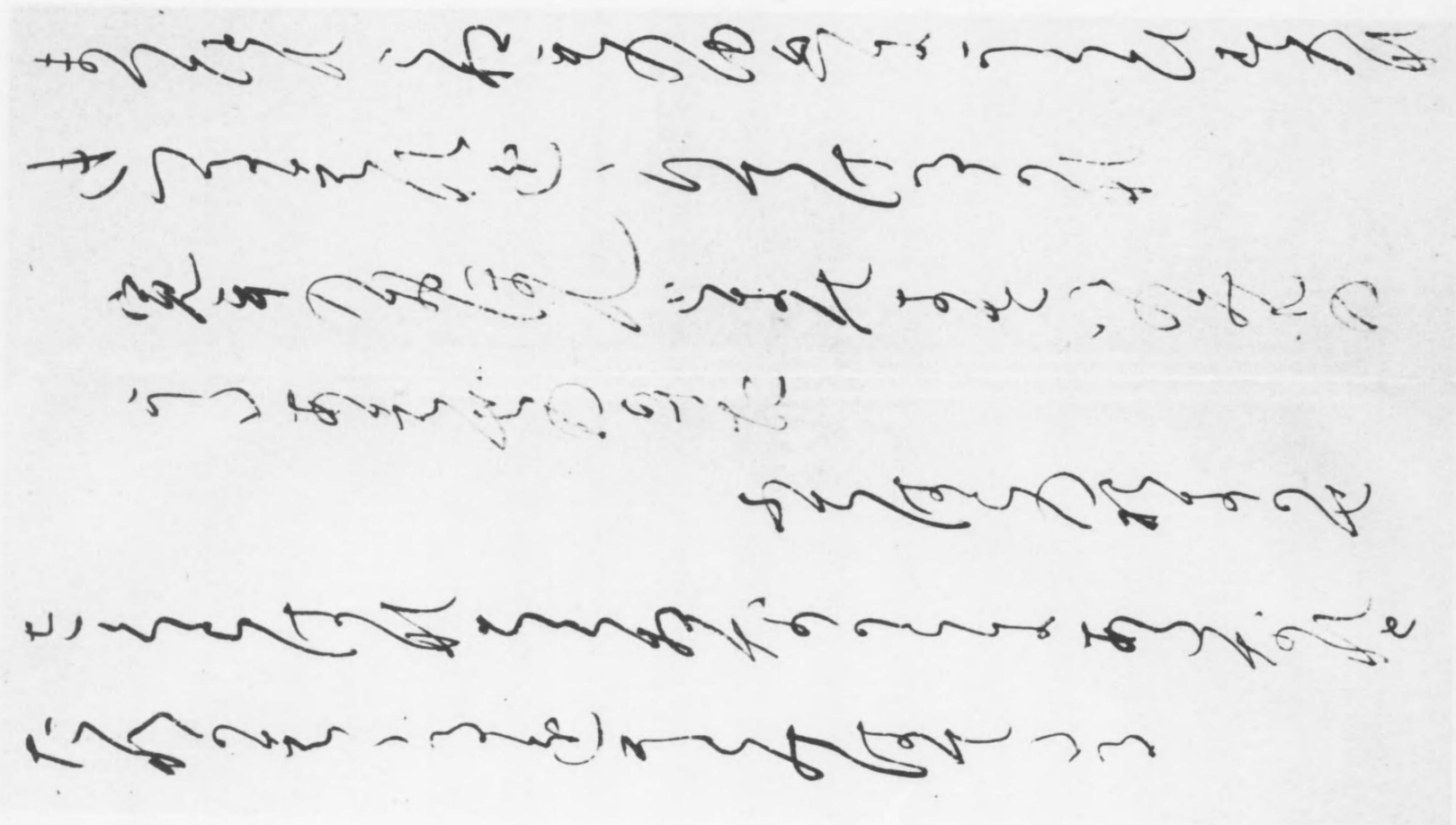
巻第八

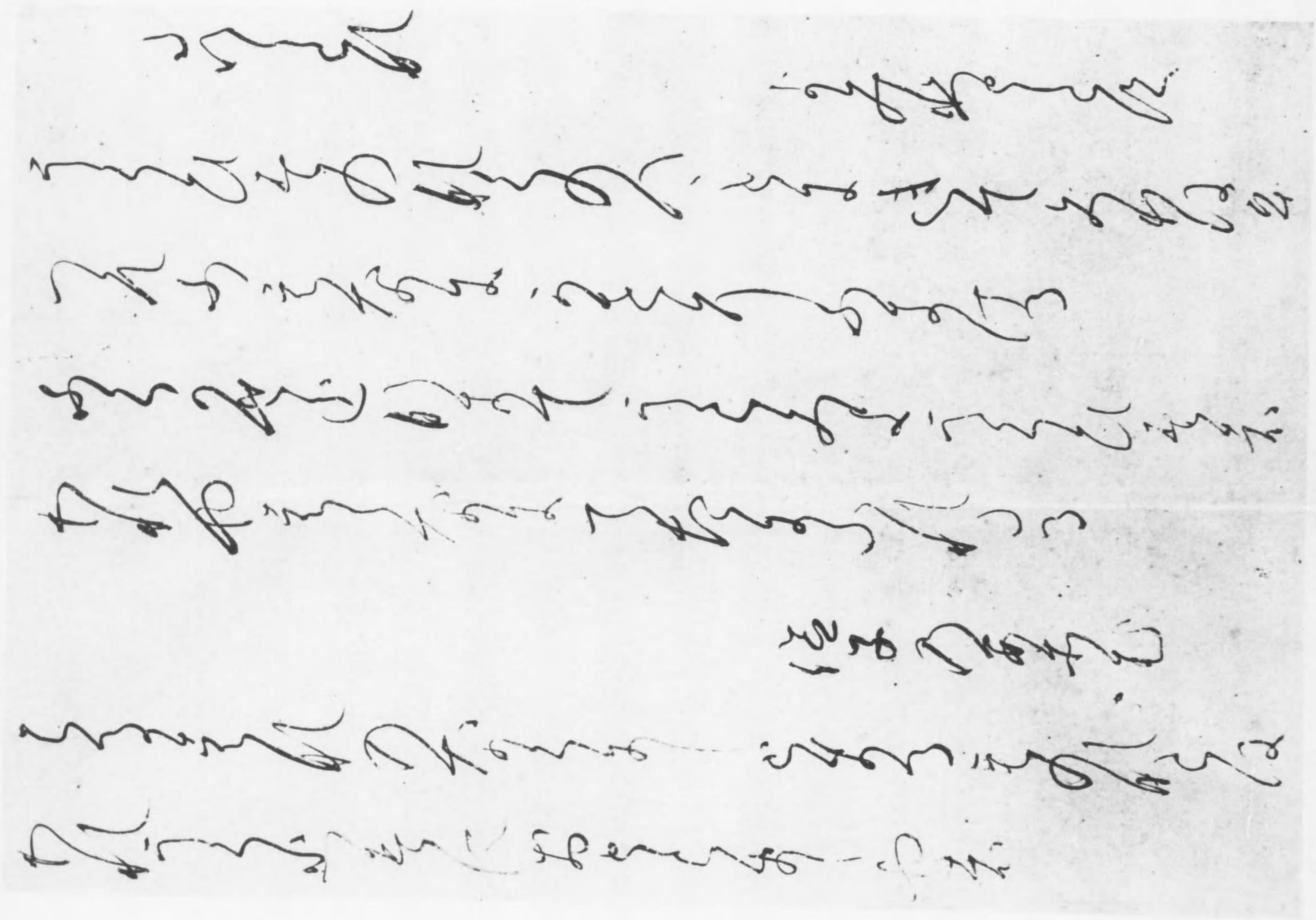
昭和十一年六月廿五日印刷
昭和十一年六月廿八日發行
定價金貳圓參拾錢

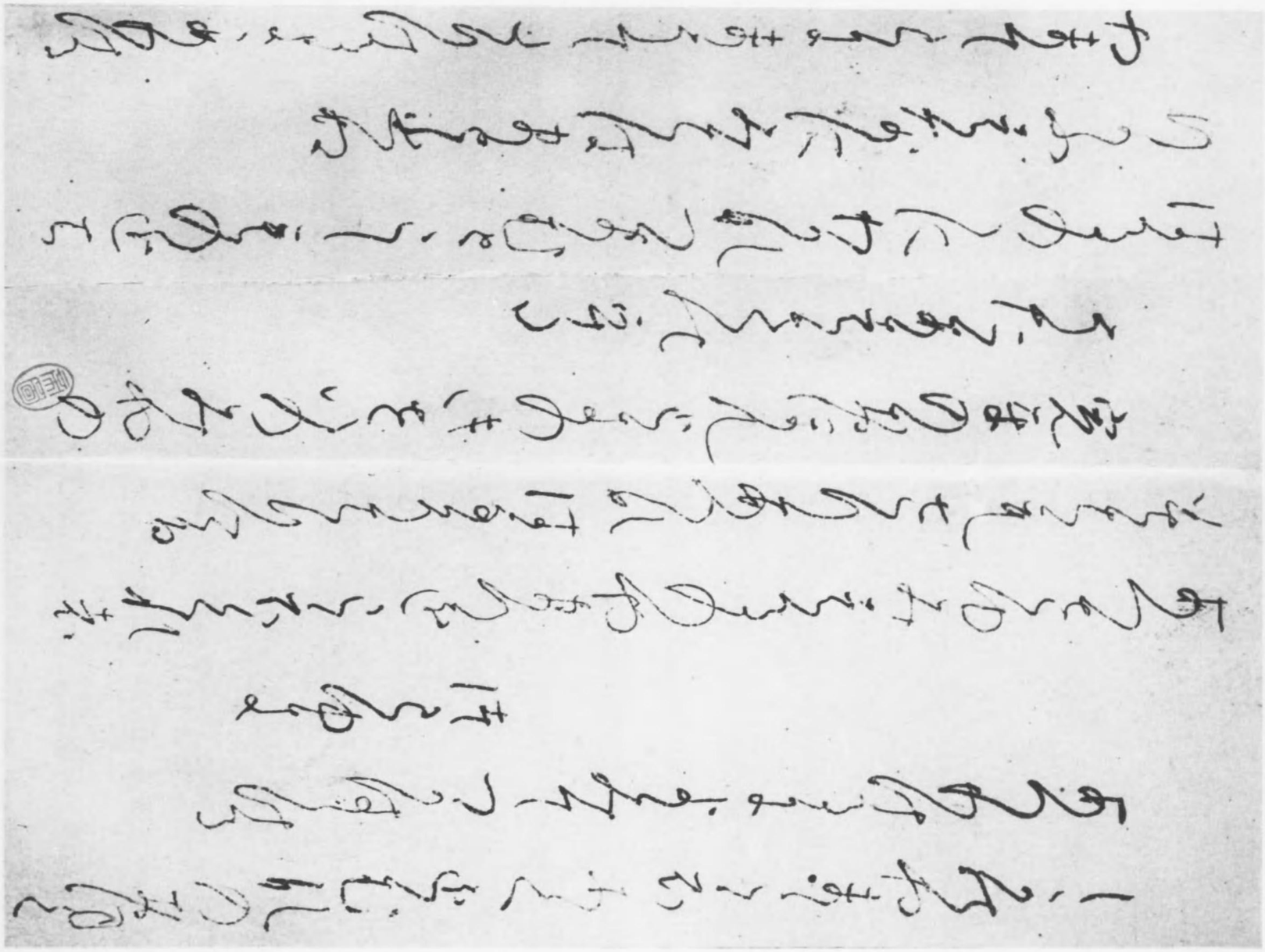
發行所　東京市下谷区中根岸町モニ番地　武田書店
印刷人　東京市下谷区中根岸町モニ番地　武田書店
印刷所　東京市麻布区霞町十番地　川端秀文堂
著者　東京市代々木大字上原字中ノ原一〇〇番地　切野高
著者　東京市代々木大字上原字中ノ原一〇〇番地　切野高
著者　東京市代々木大字上原字中ノ原一〇〇番地　切野高

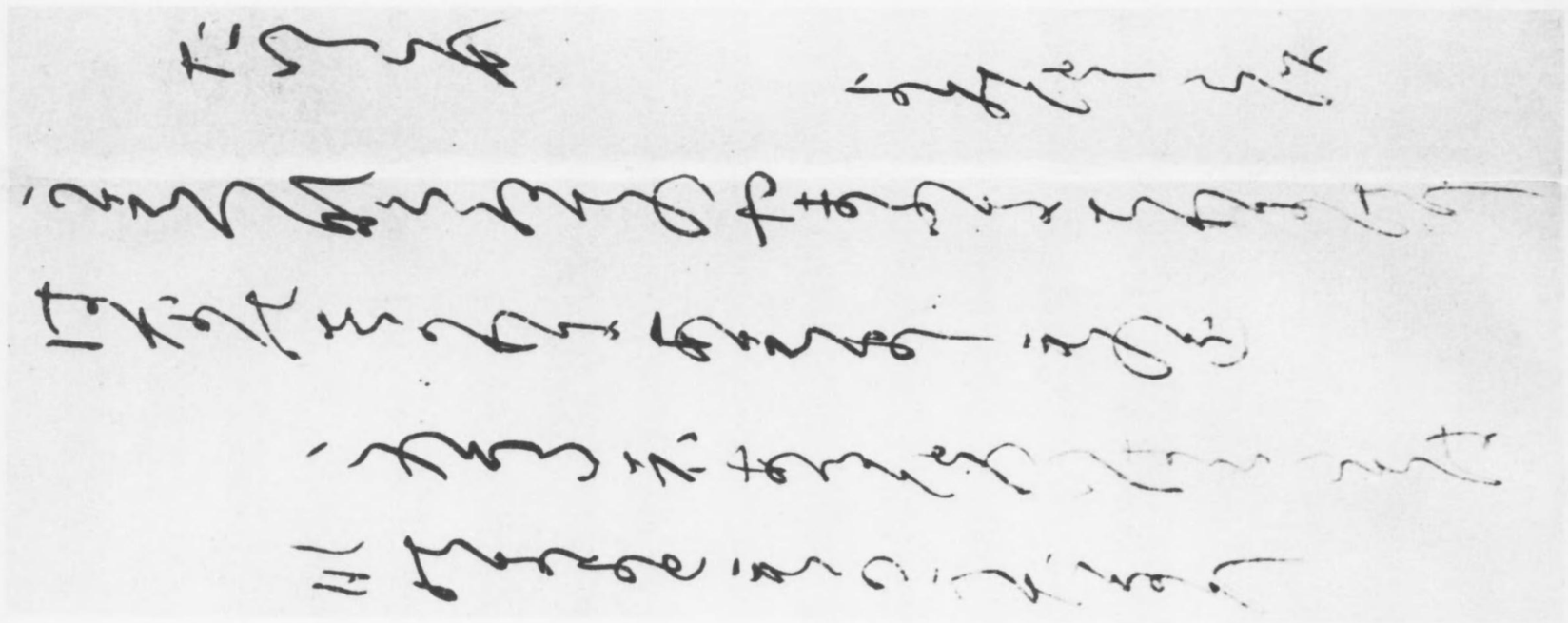
切野高（乙）稿二第











ゑをあらはすとてよめる

みね

あしたゆくゑをたづねてつまどふ
いろつくとなれるゆゑなり
やまぶきのうつろひにけるをみて
はるをへてかりがねのこゑ
つねなし

なのみしるしはうつろひにけり
いまはをしみてなにかせむ

ぬつまとなるべきものをあらたまのとしをへてはるのこゑ

古今倭詞集巻第五

秋哥下

ふるさとのみてらにいりてあそぶ

ゆきあり

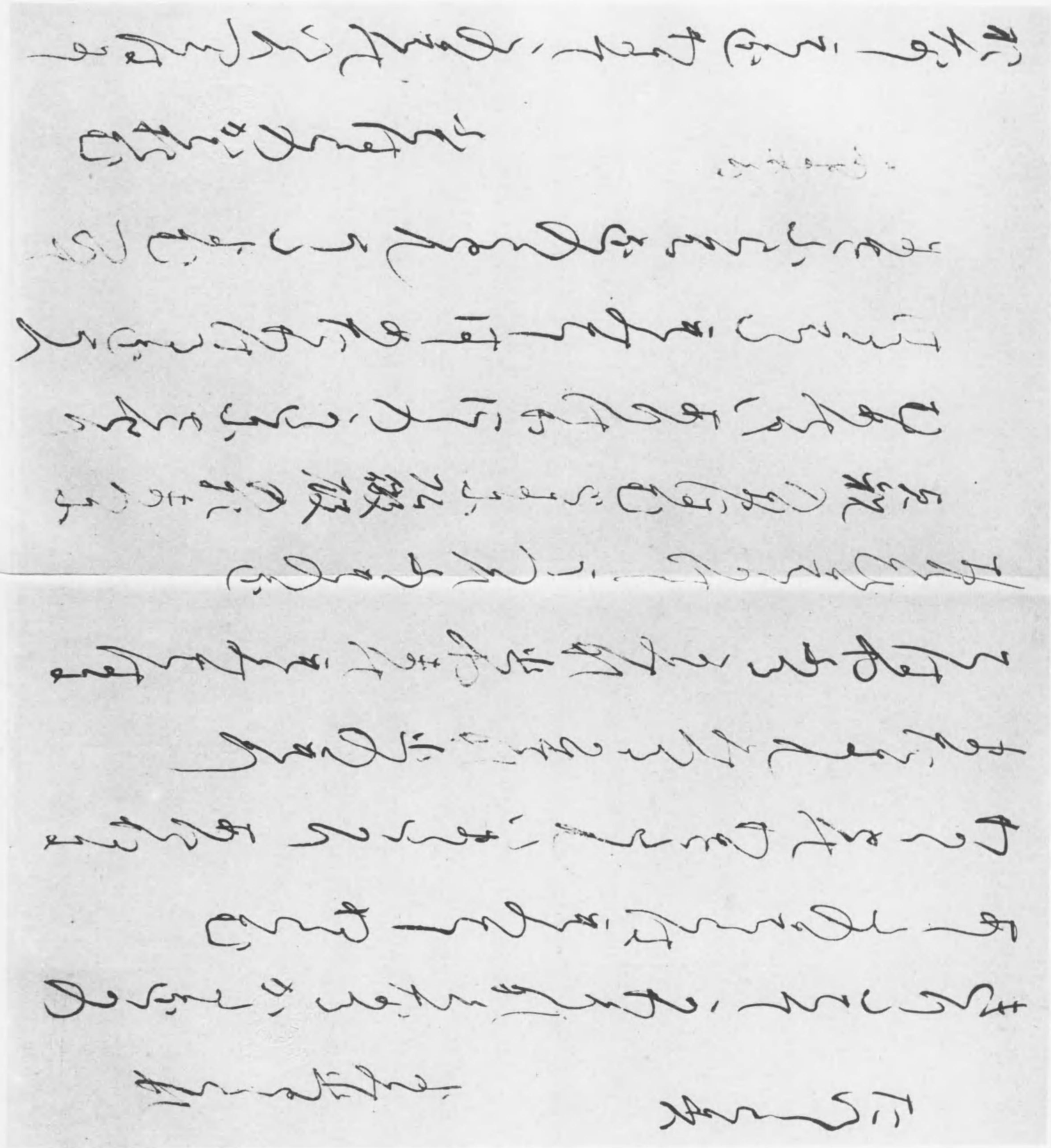
ちるもみぢのあとをとふ

ちりてのちあきのくれにしぬれぬ
むらわまりてふるむ
ちりてのちいろはをわすれぬ
みのうちなりけり　あきなのりけり

あきのうちはけふをかぎりと

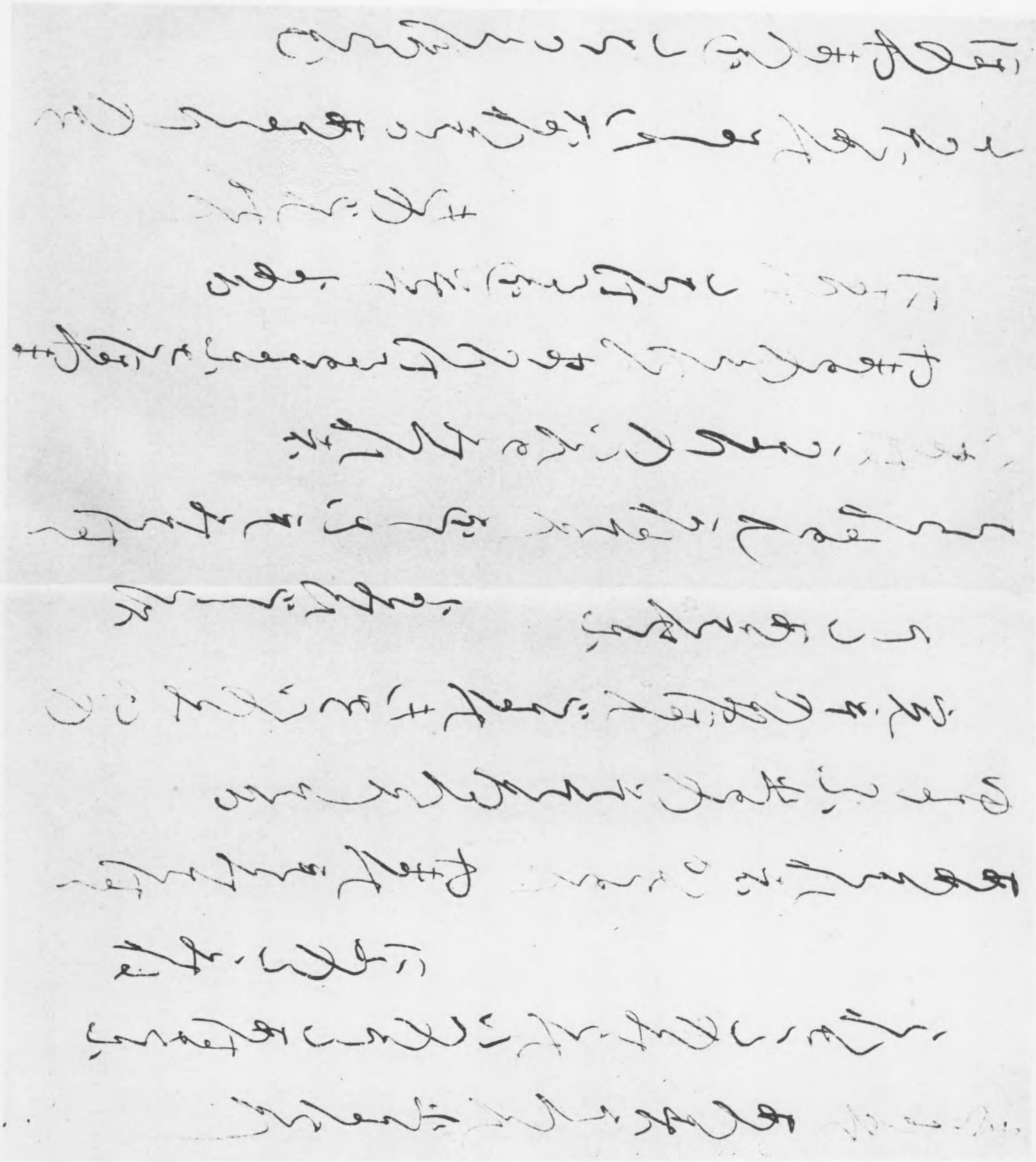
きりよりそち

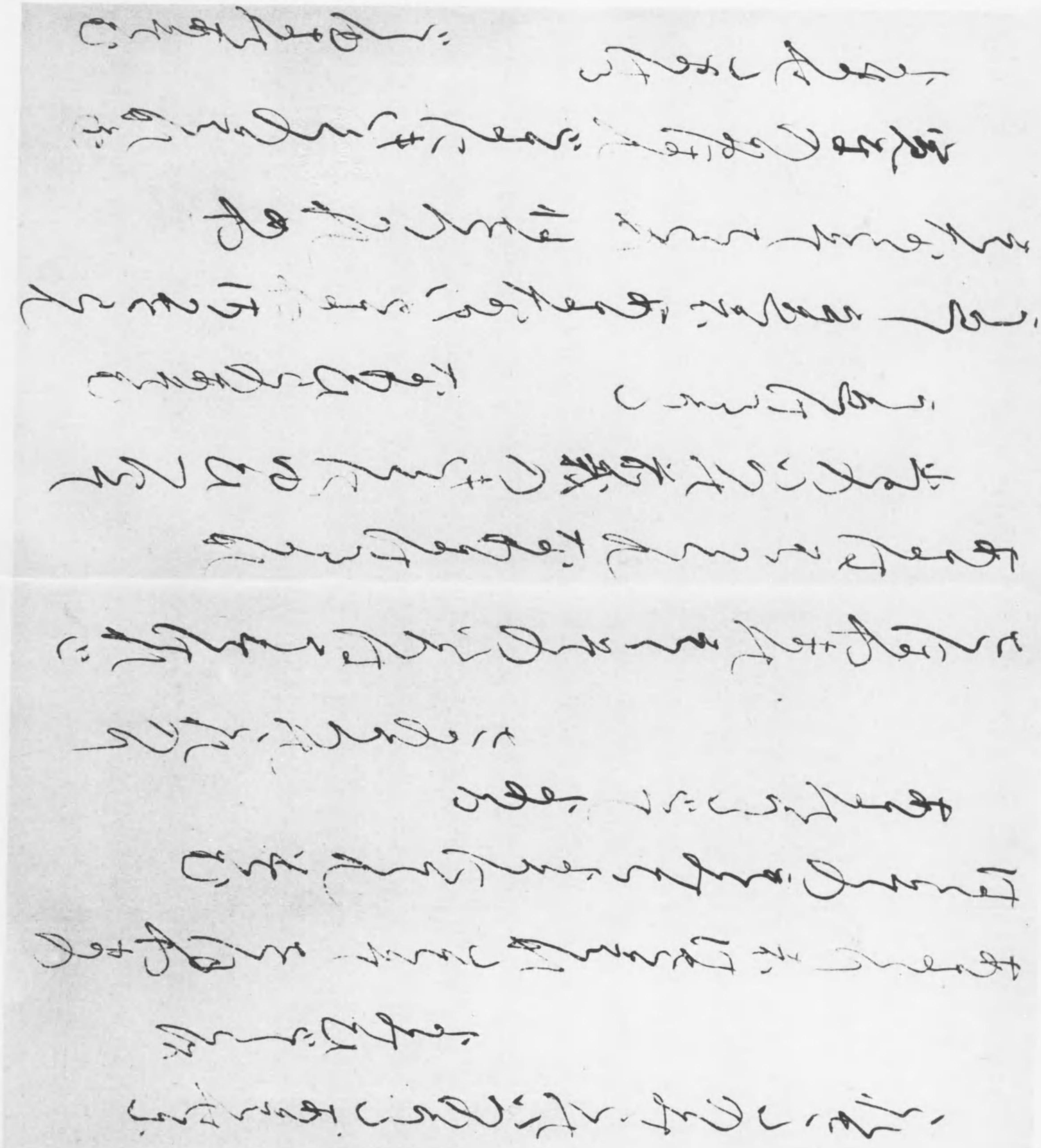
しみてをわびるはのつまをふるそれ
おもをわ　あきぶよりわるそれ

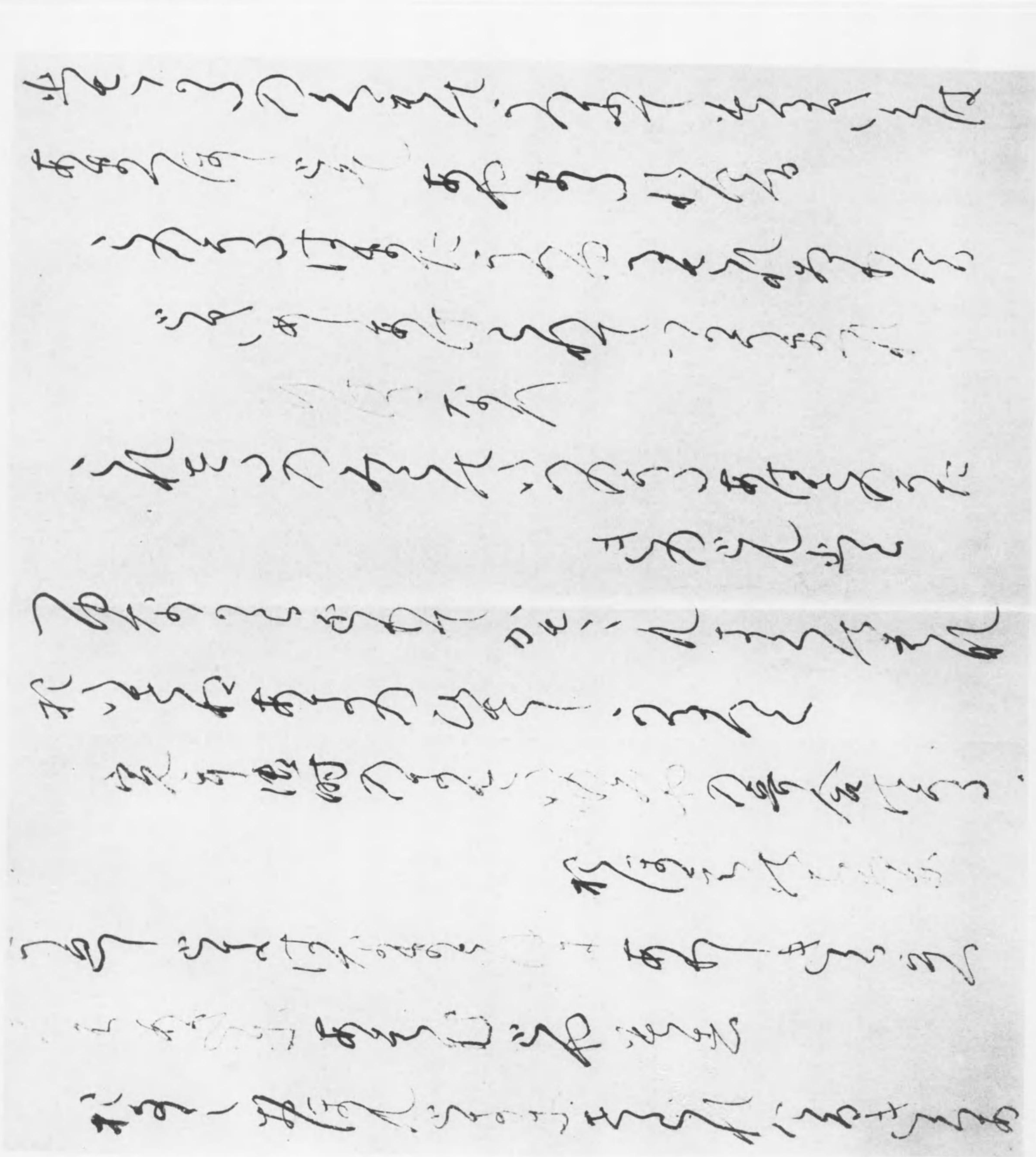


[illegible]

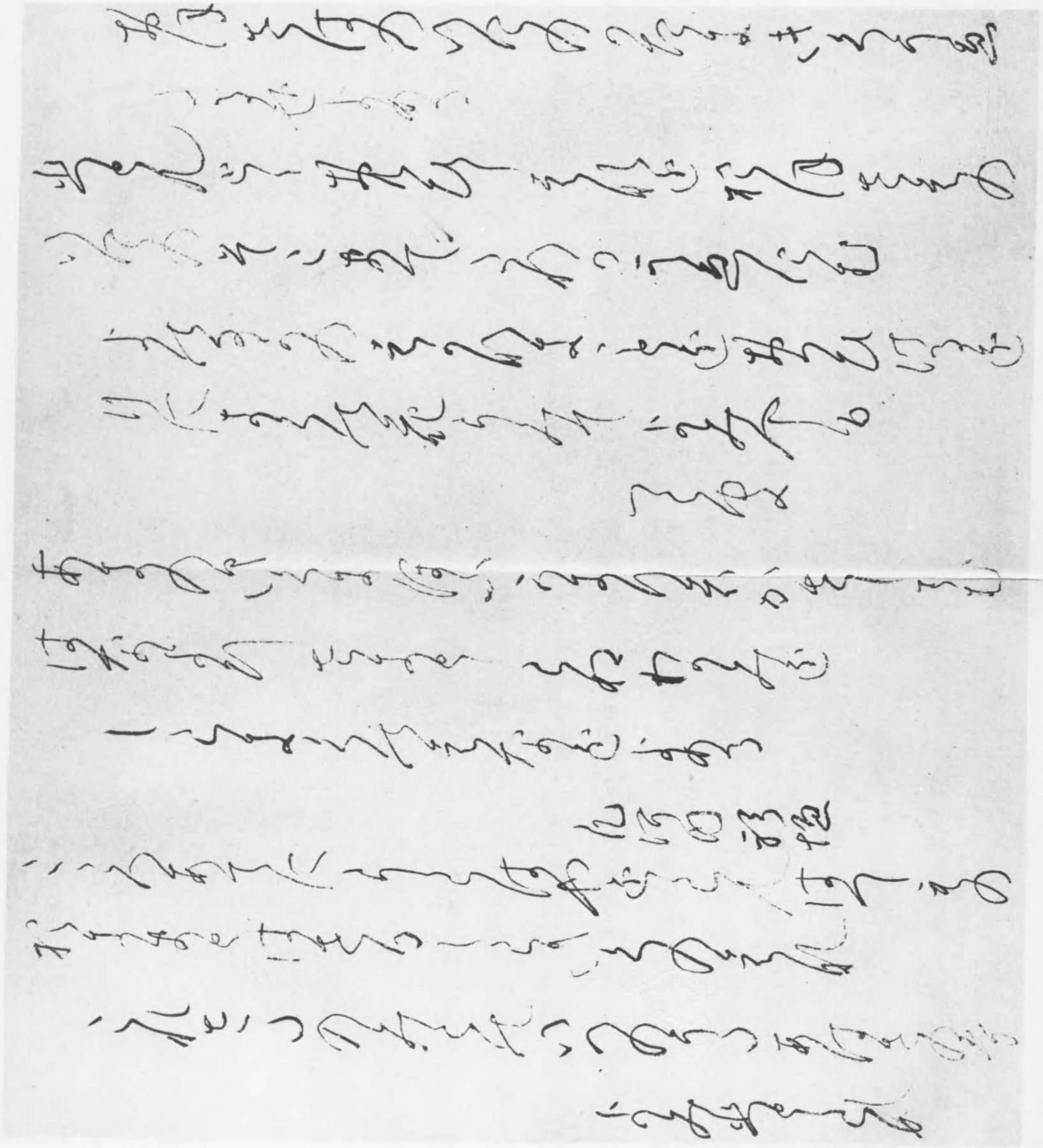
あきのつゆいろいろことにおけはこそやま
のこのはのちくさなるらめ
もるやまのほとりにてよめる
つらゆき
しらつゆもしくれもいたくもるやまはした
はのこらすいろつきにけり
あきのうたとてよめる
もとかた
あめふれとつゆももらしをかさとりの
やまはいかてかもみちそめけむ
かみのやしろのあたりをまかりけるときにい
かきのうちのもみちをみてよめる
つらゆき
ちはやふるかみのいかきにはふくすもあ

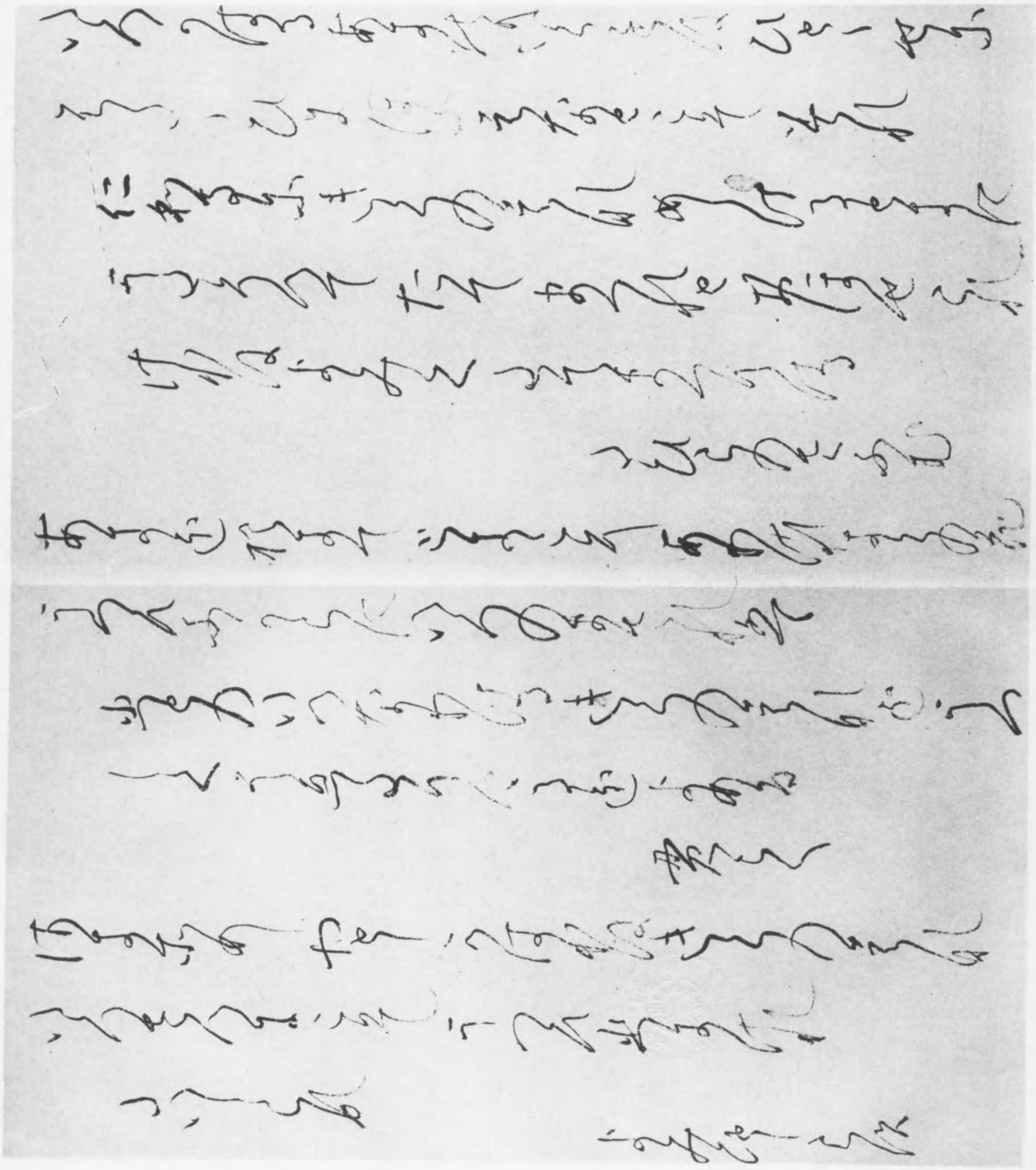




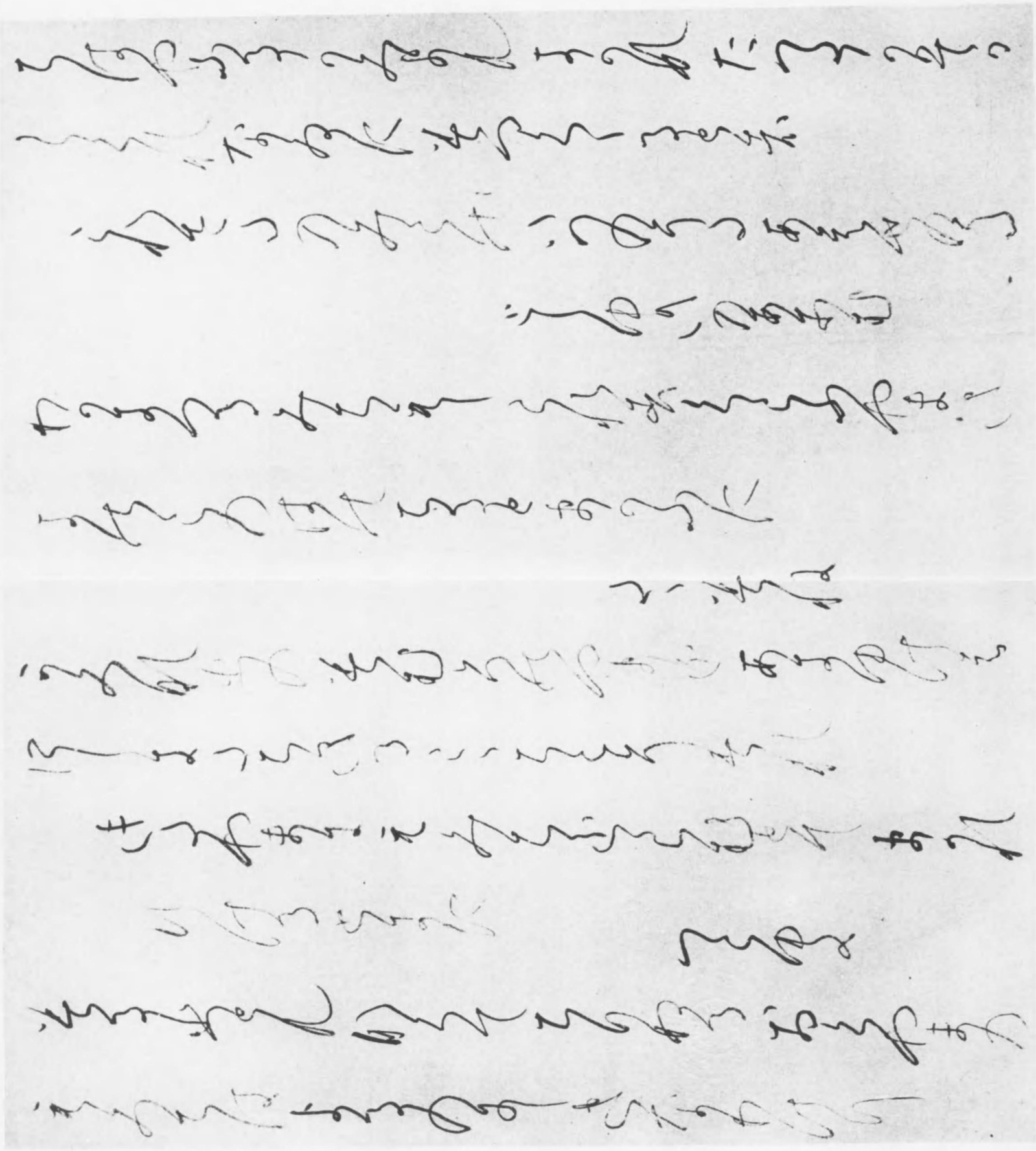


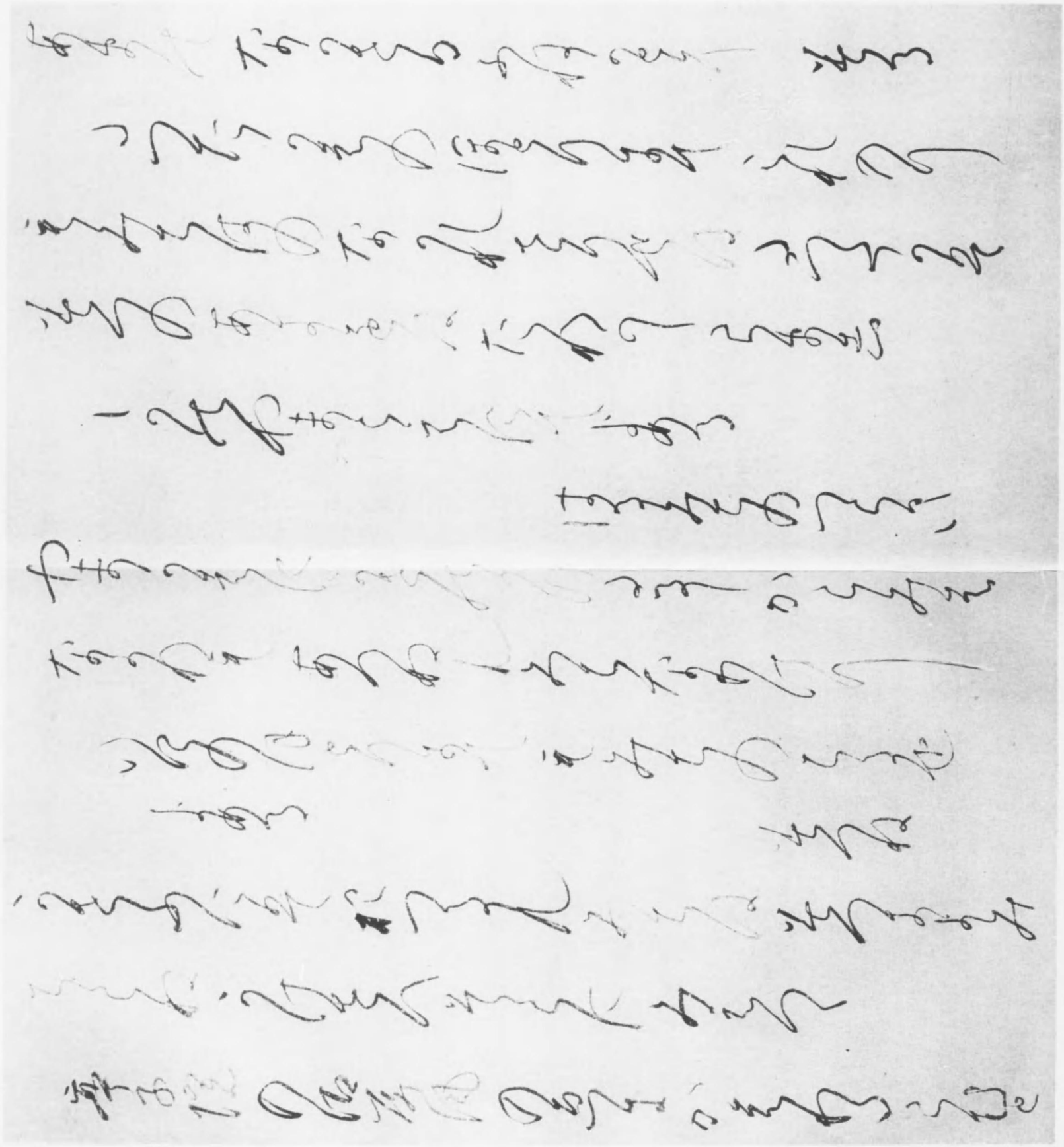
つきよに　はるさめのふるはつゆかさくらのはな
すみてわけるまそなたはるるた
ろうあわかはなのはなのつまよるらむ
けふこそよめる
はるのうたのあそひに
あまのそれあまのあけはまたてさしてらは
そたのあなわのれみのよあそ
仙宮にまうてわ　はなのりたれるを
そきいはふし
わかそてはれやまからやさらにつゆのおくらむ
いつもよりわれしつるつゆけき
きみまさなのみもとめてひさしかる
おそてつのたなよめる
友則
はなのみそむかしのかをにほひけるかな
くものかみの
あやなるかけれ





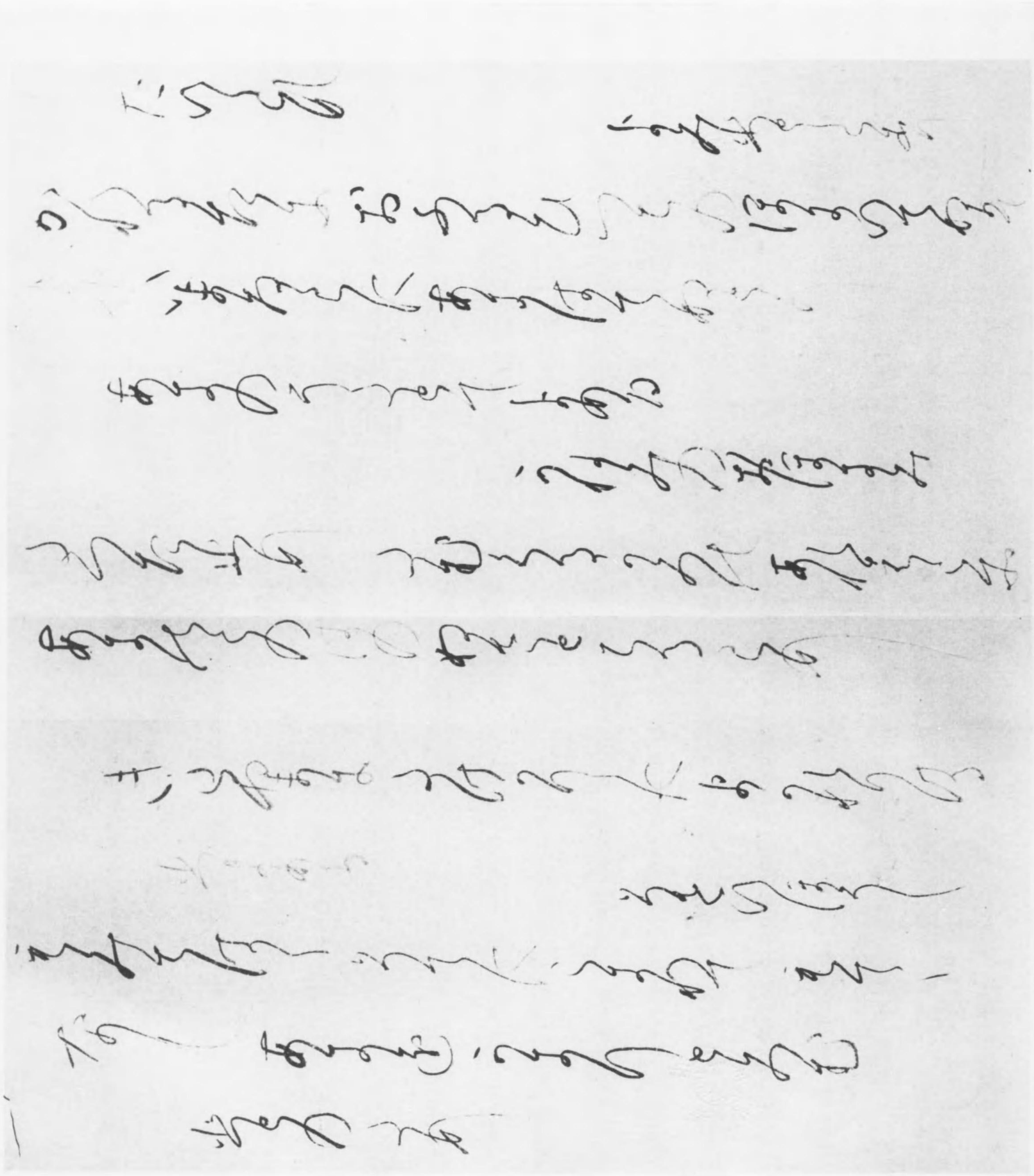
かのうはあはつらそみちははやろ
こひしくはそそんしのはむんせそはて
みすゆくとしてやまれうのつき
あきのやまあつちりわたるこそみそはの
ゆふたつののかれそしうなしや
あまはかねそみてはせまふかしまね
そらをはわけてじうをなし
ふみわけてたらかじはむそみちは
そのうててふそふみゆのうら
あまのはやまんとわうてくせうえれ
つまそみそれうはふつまつ
ふくのそのるかのいつまみつはうえ
あきのめくらはのてわはなかけり
せすふ

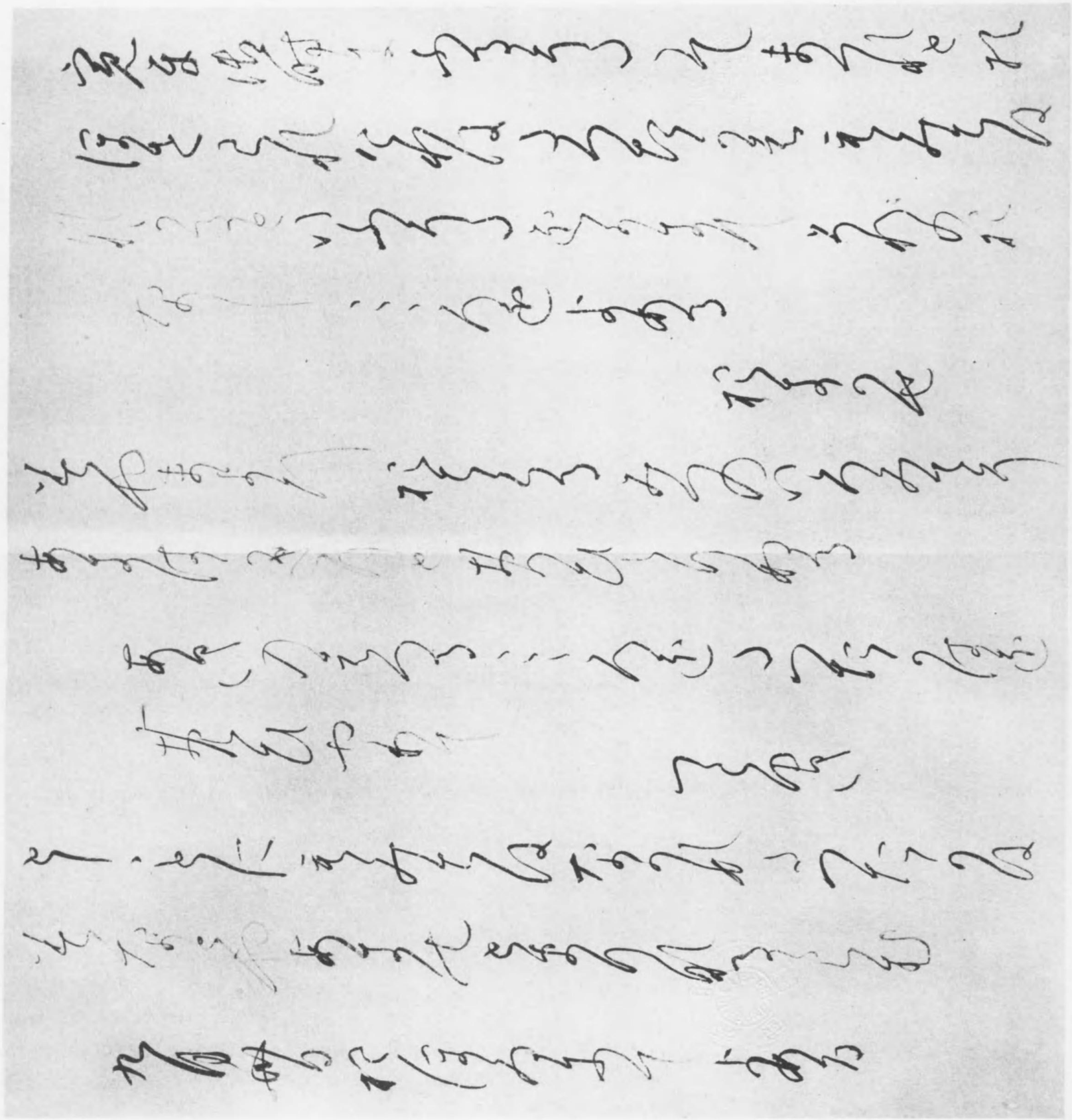




はるかなる こゑみなかきのこゑにひまなし
うつしてをらせよませこそかれこゑつらし
まつれかる よみひとしらす
こゝろのいまたせ かすむこゑみえはく
あめと ふるもし みなはまそくら
こいしれ
よみひとしらす

ほのかにもいてゝ やまのこしもみちきえ
いなはのつゆま わかねよはなし
かもこのみこそいつのとまあはまく
みつね
ちさね
やまかせあまの いはまおちて
あいしれ おほえこえ なかめつるかな





九月廿日付ほうそう　あり

ゆめまくらたびなれぬ　はしくれ

うきこころ　ひとりぬる　ものかな

和

なきしつる　ひのこえ

みつね

なきしらぬ　つゆのいのちを

ものとはば　ひとやいかがと

おもふこそ　あはれなりけり

巻第五

古今倭歌集巻第六

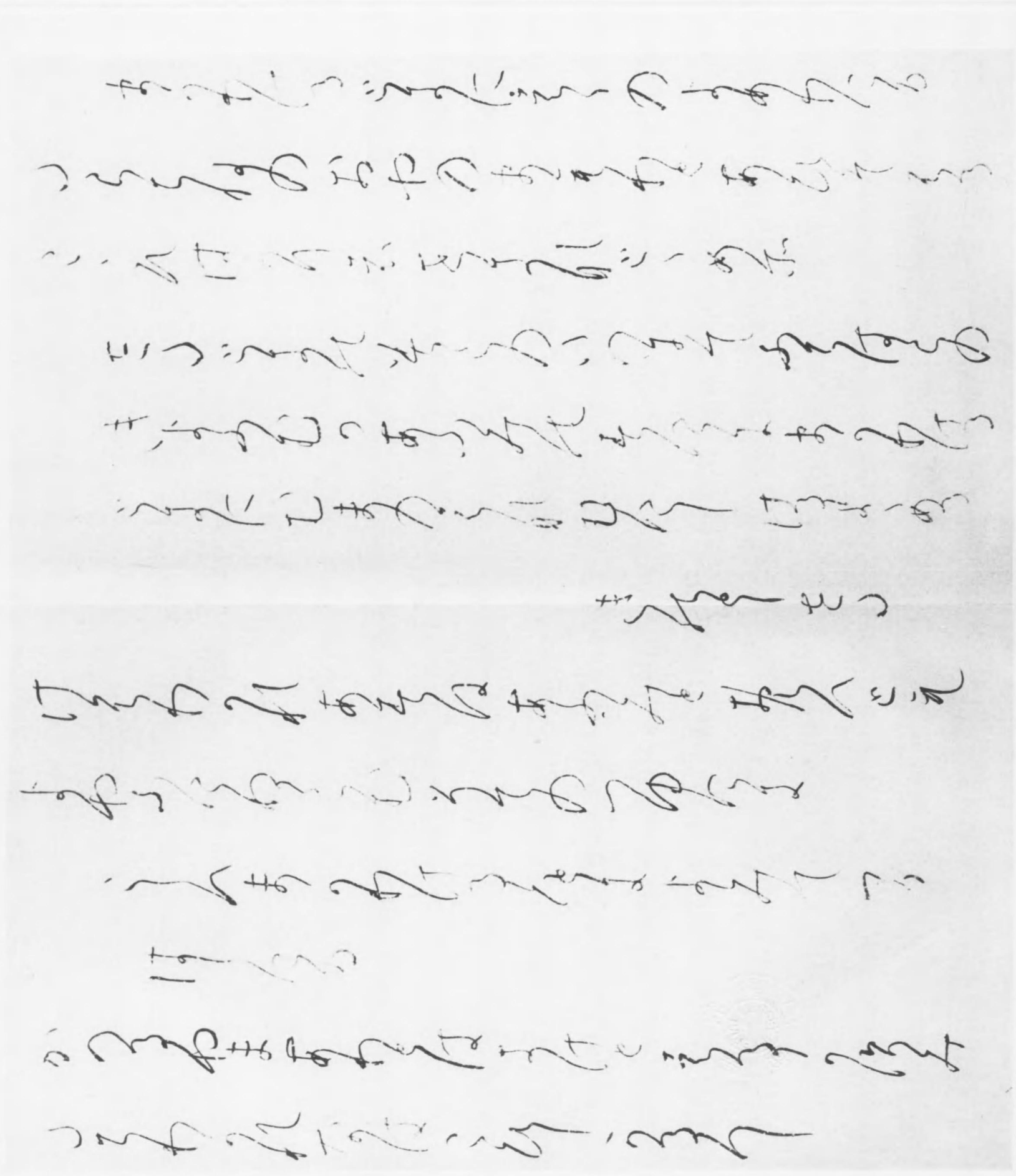
離別

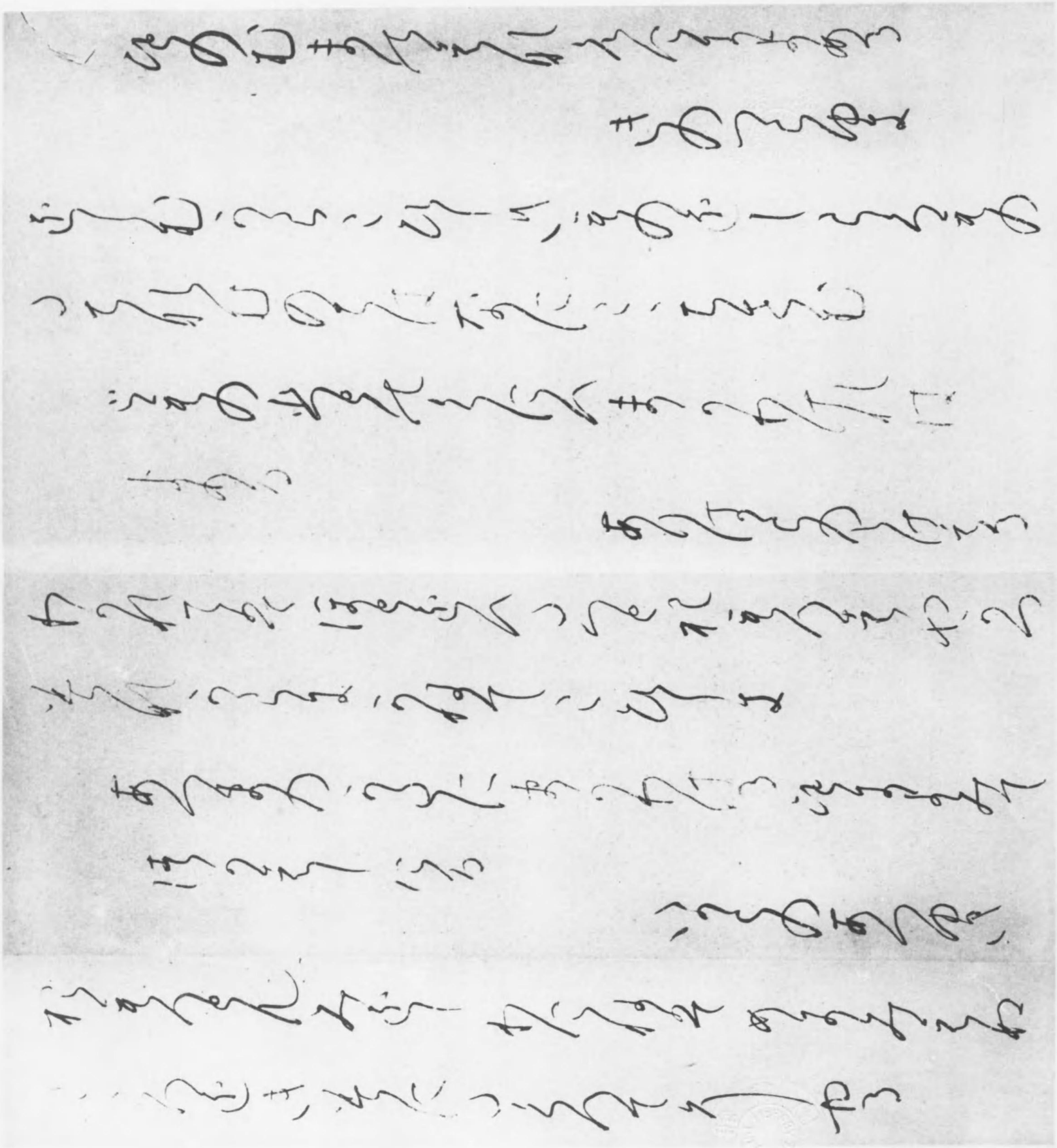
たいしられ

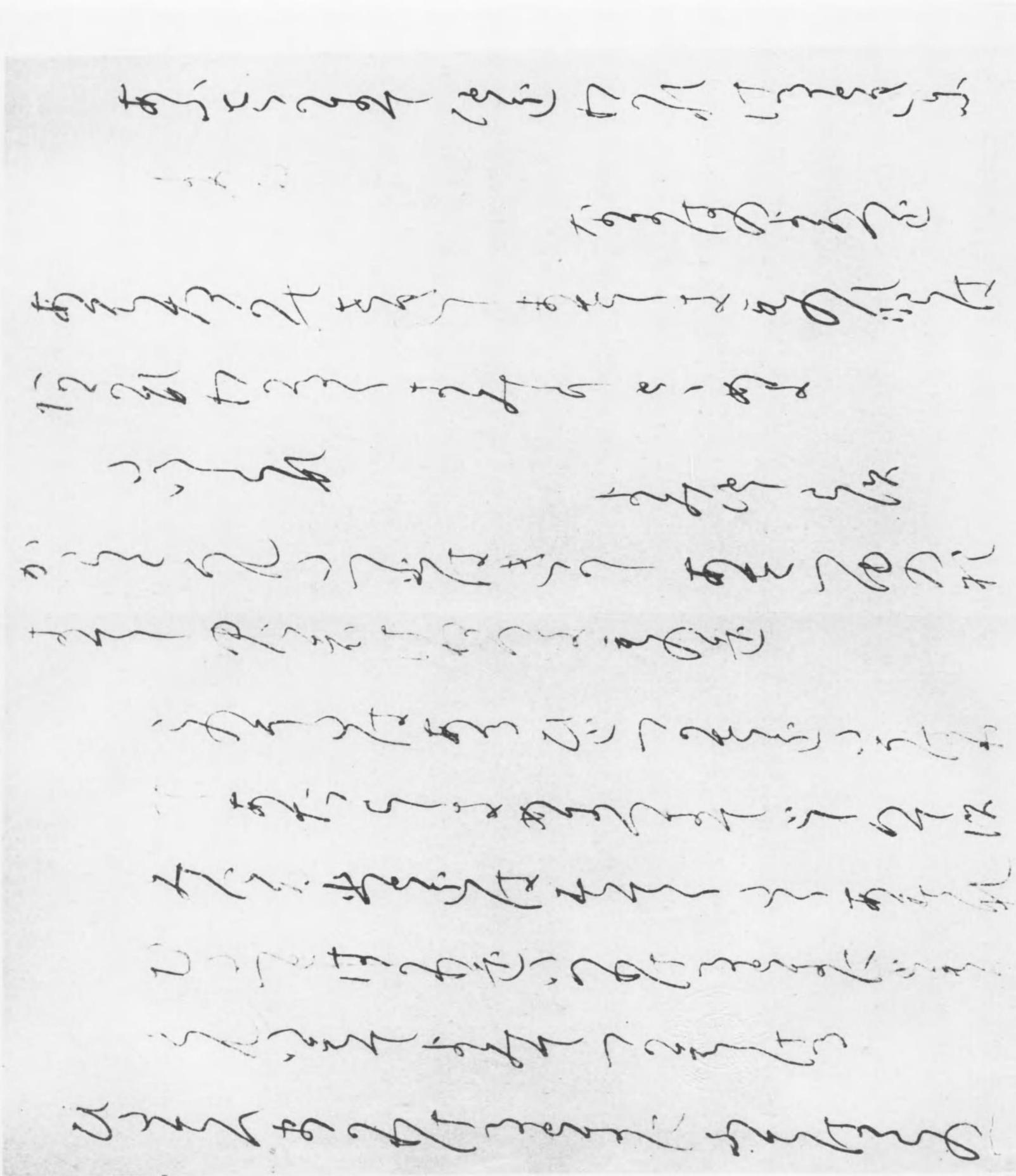
あかぬこのゆきもひとのあるむ
こしちかれなのはのかやまれけまれそる
まつもしきりそいまうるわるむ

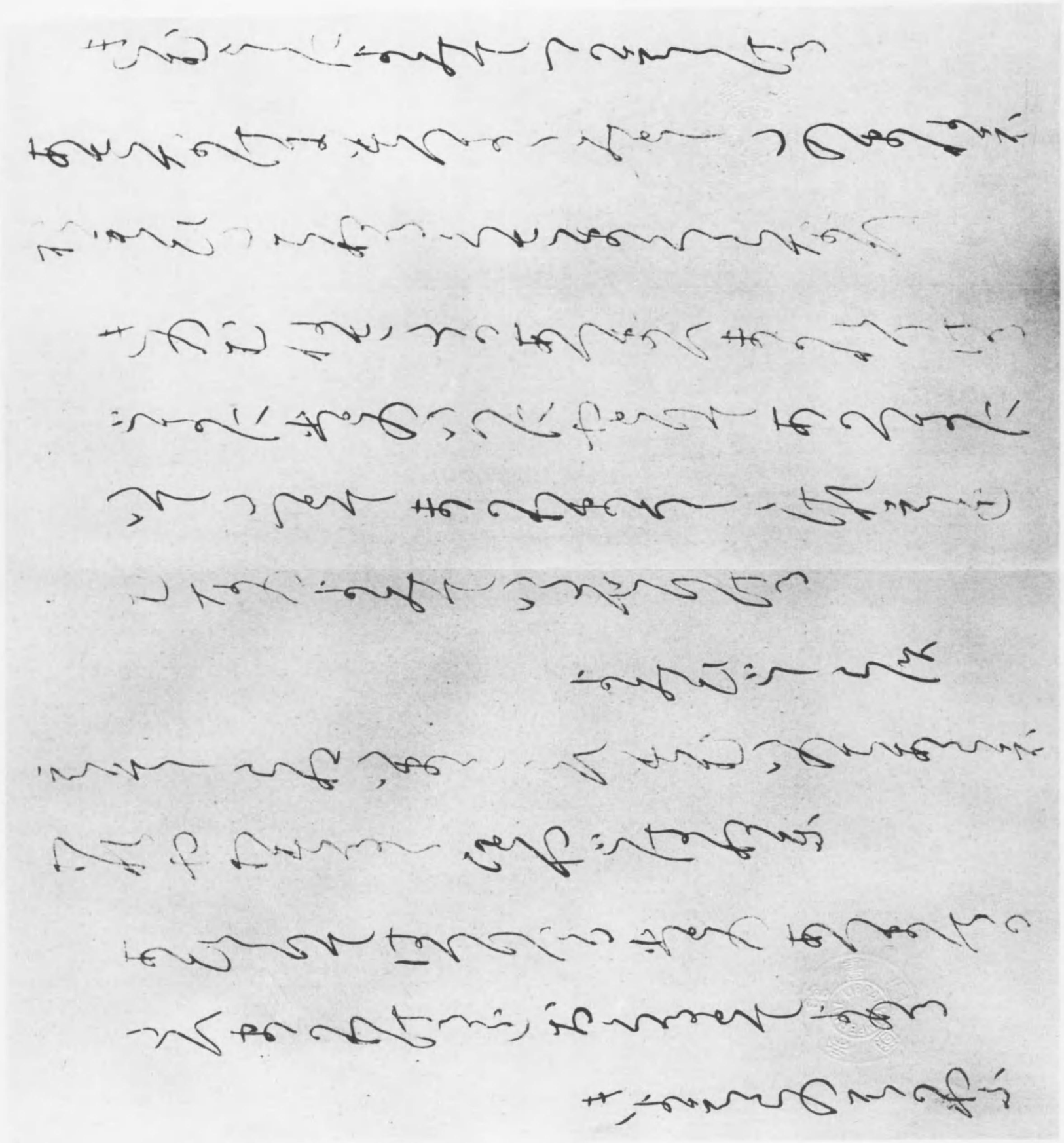
よみひごらた

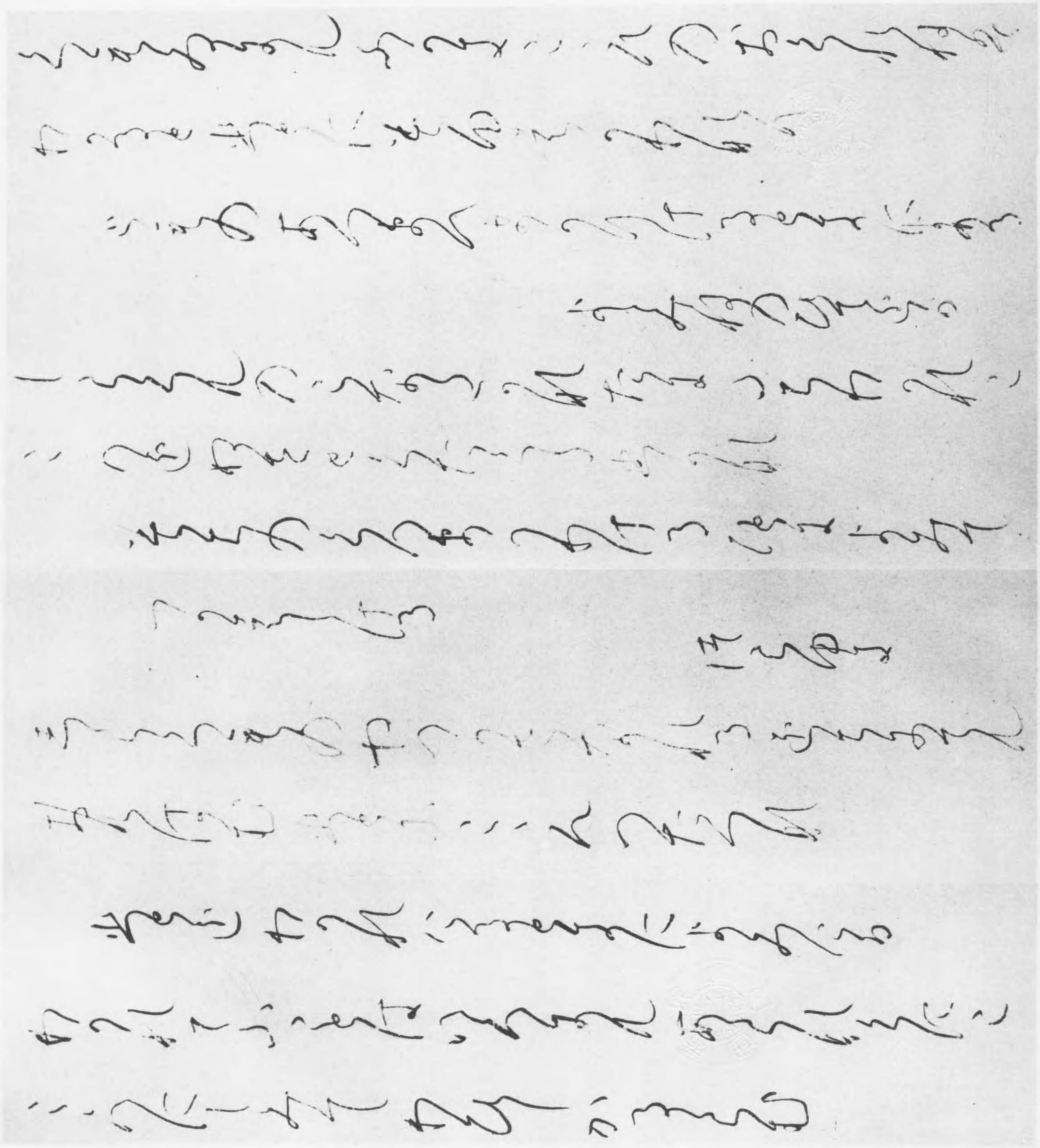
はやいそらあわしそそ
まつのそそいつのおるむ
うまりはいそそあのよそたわるとそ
ほそこころおそそるむかえ
ものいそそのみそそのそそはな

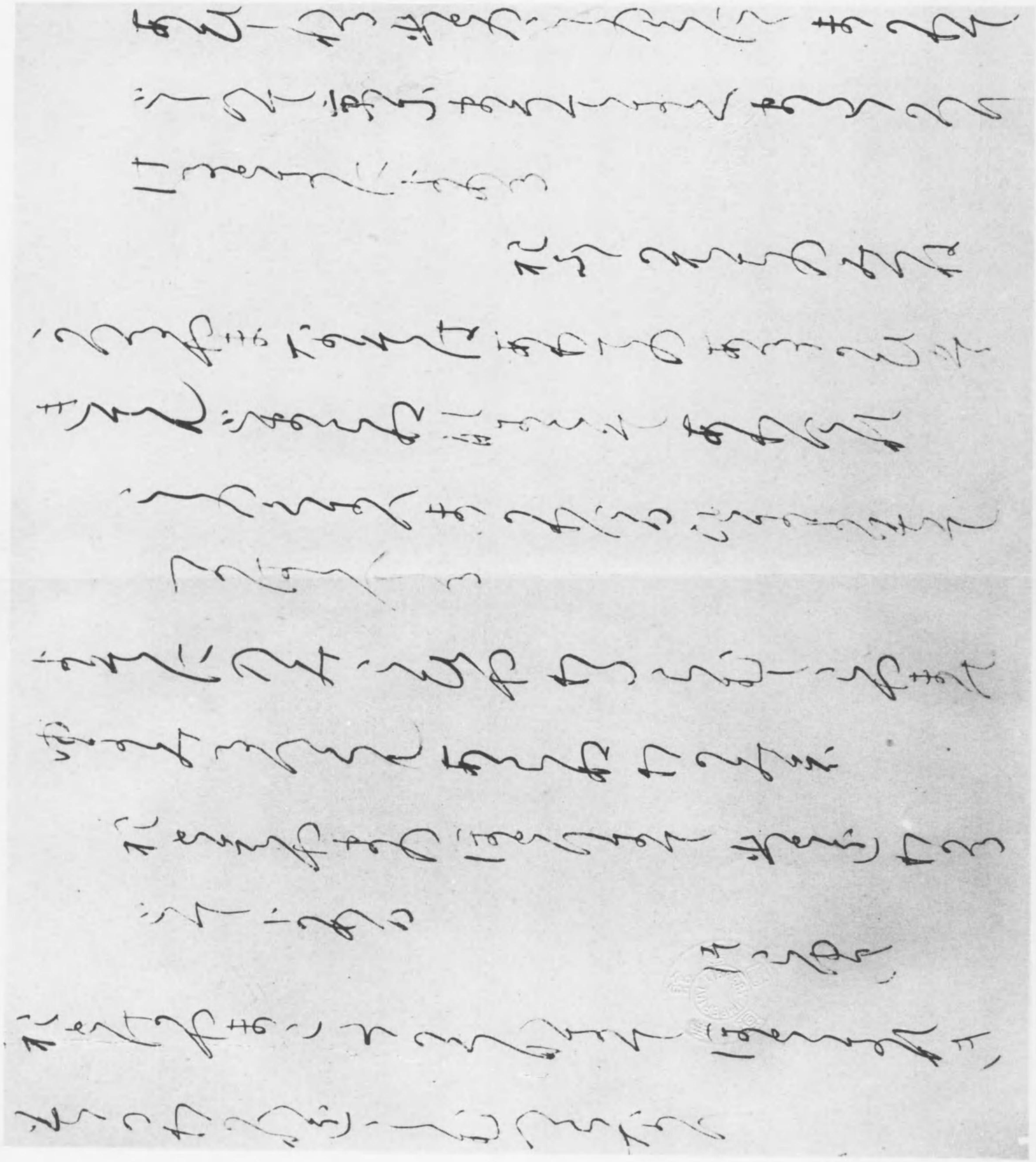


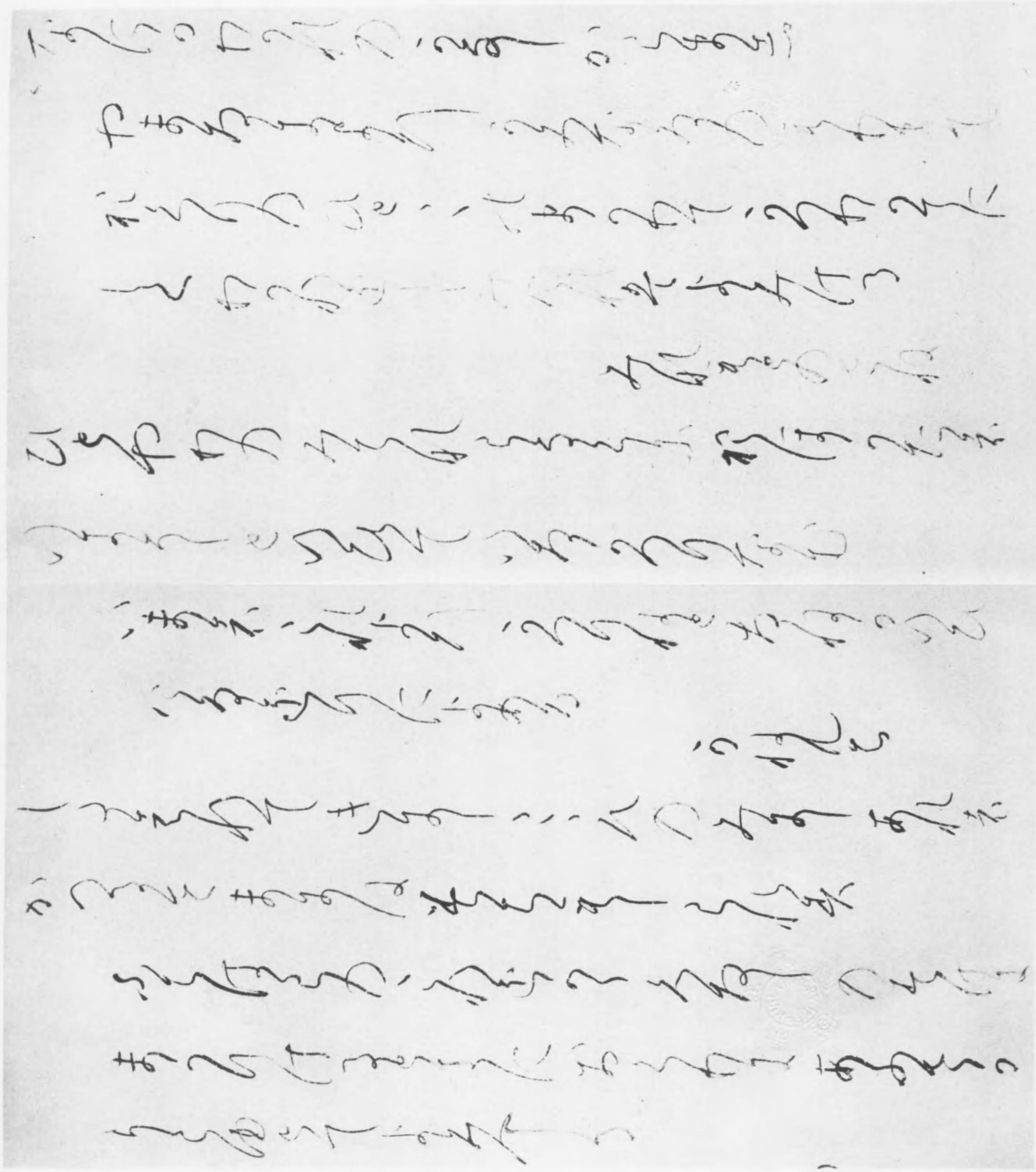


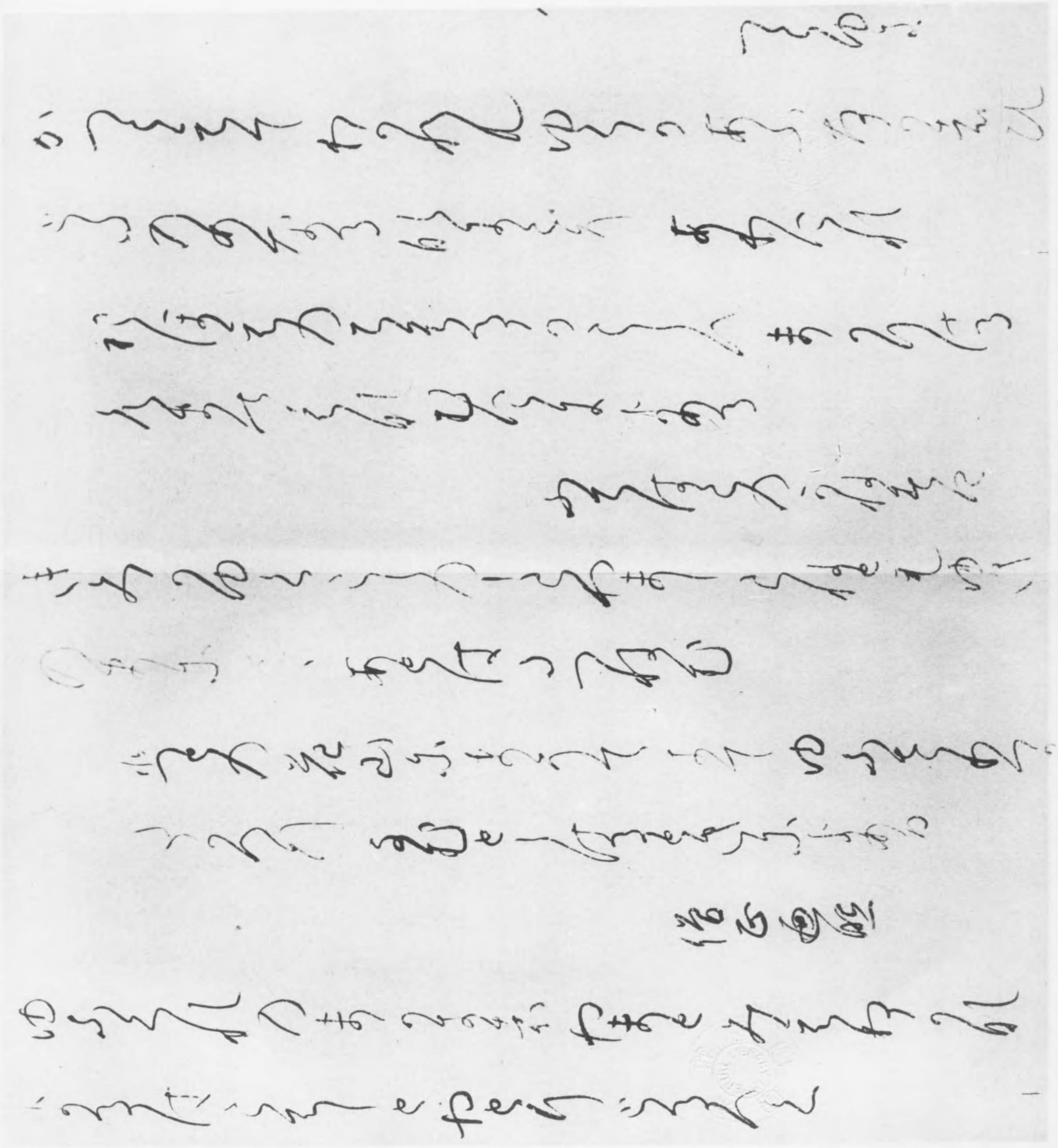




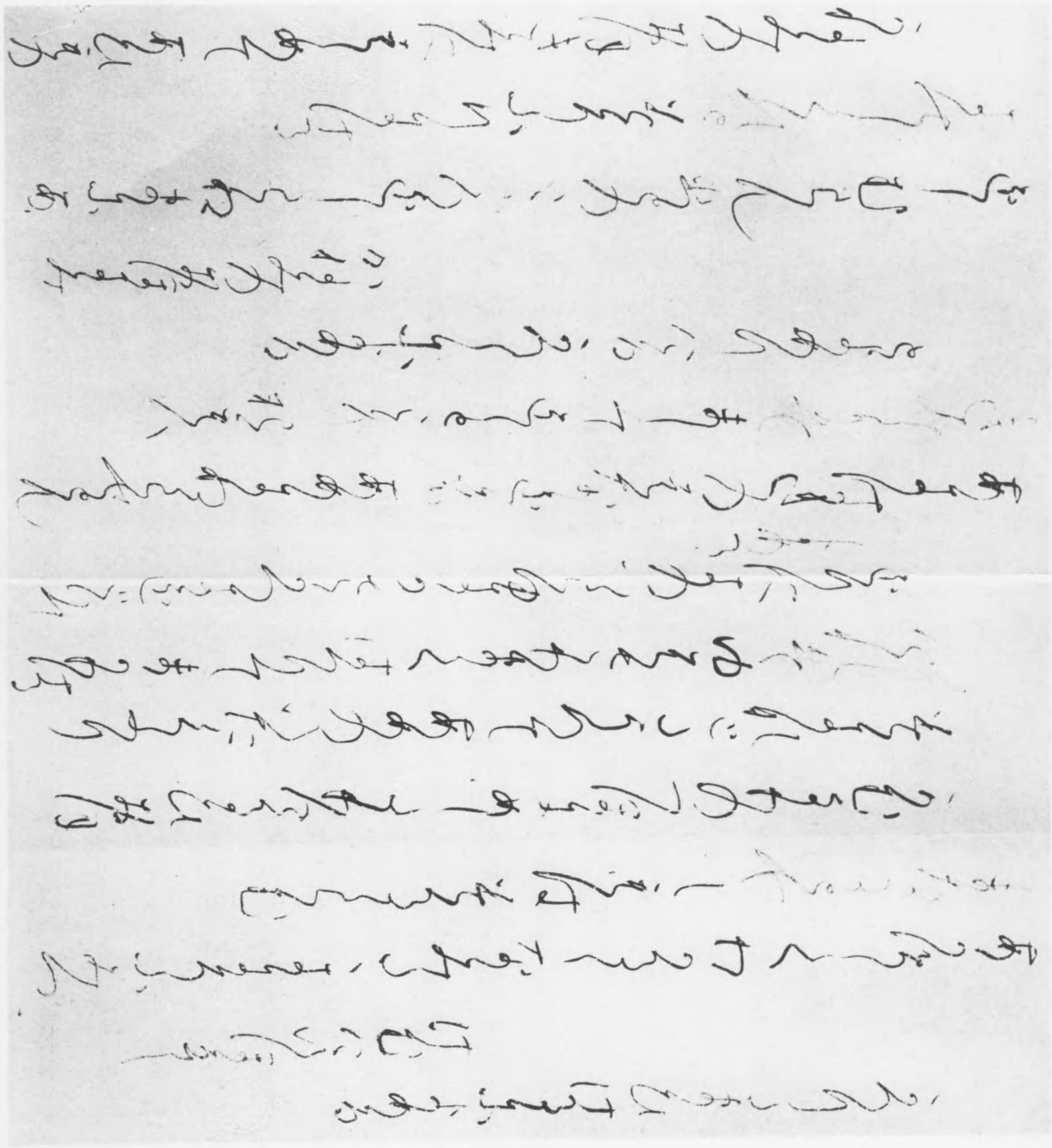


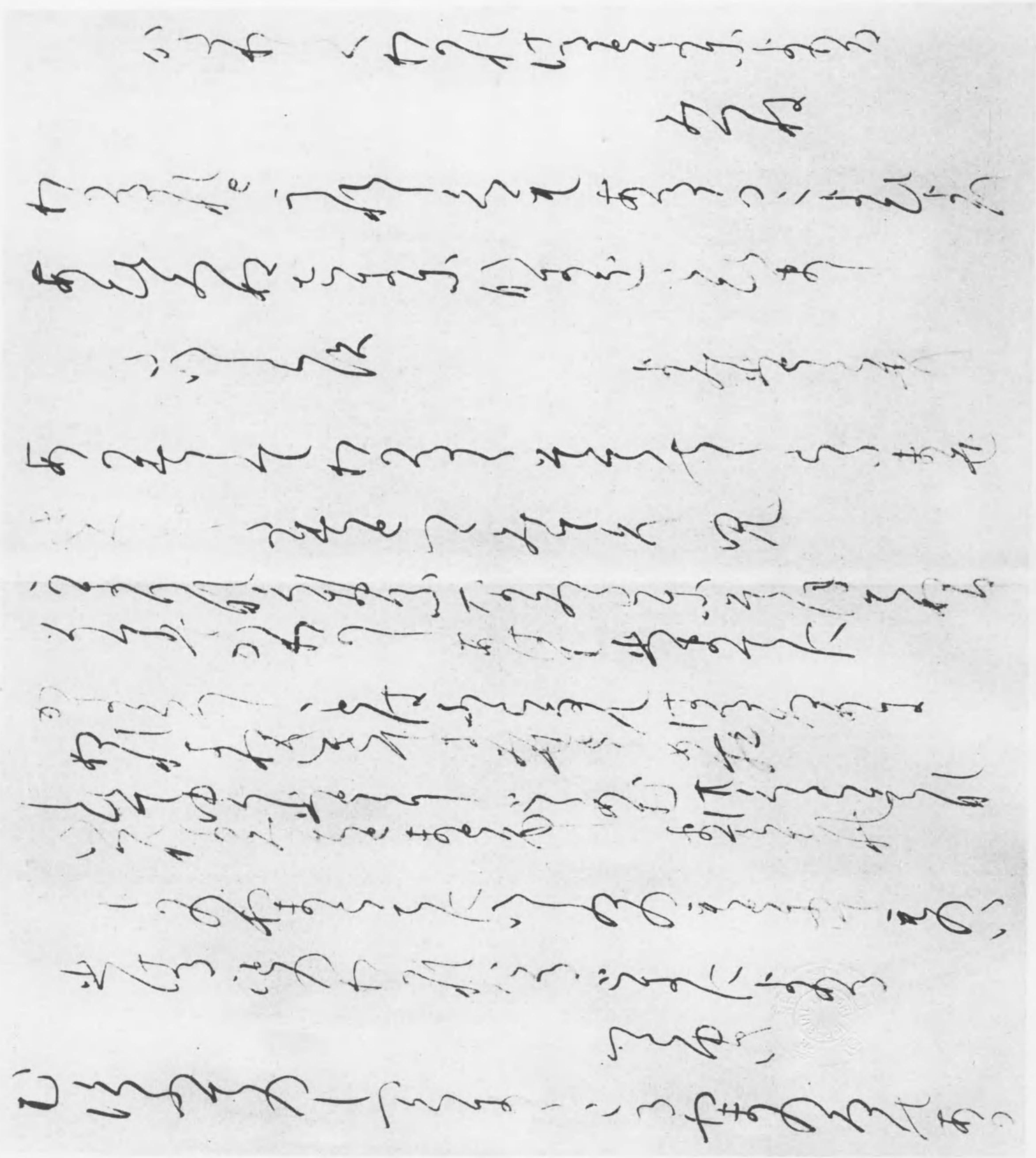






水たまのほりてうかはまうてよせけり
いとゝわれはけふいつてふよあかね
律師有仙
われらはやまのはちすまいりをこそむ
ふあむしましこれのおに、、
雲林院のみこ舎利たてまつりけるのはうに
このわけるをのにてくらのはうれもとに
よみて
西行
やまのをくにちりくらふかきよのかたちも
はなのかのまつたちそむかなつく
角仙
こゝれからはきみをたのみてくらにはすてるむ
かつそむれのちまにわすれあるね
にわのみとのそらにおはしまするとき
まそろのさいこらむしまれそしおしく





でもひとにわかれぬるかな

みちにあへりけるひとのくるまにも
のいひつきてわかれけるところに
よめる

紀友則

したのおびのみちはかたがたわかるとも
ゆきめぐりてもあはむ
とぞおもふ

巻第八

391
10

昭和十一年六月廿一日印刷
昭和十一年六月廿五日發行　定價金貳圓參拾錢

高野切第二種（乙）

編輯者　東京市下谷區中根岸町七二武田墨彩堂内
かな名蹟全集刊行會
代表者　武田基一

發行人　東京市下谷區中根岸町七二
武田基一

印刷人　東京市荒川區南千住町六丁目一六〇
黒川秀藏

發行所　東京市下谷區中根岸町七二
武田墨彩堂
電話根岸三五七番
振替東京六〇五四八番

終